



目次

鎮魂の山旅	佐藤 恭	2
雲南省怒江峡谷の秘峰 (2010年10月)	中村 保	6
南アルプス悪沢岳登頂	三井 博	12
『今は昔』の現役時代 ……踏椿会(村上泰介・本間浩)	小島 和人	13
黒部源流山行	小島 和人	19
夏雲をこえて ——再会の富士山	坂井 溢弘	23
大雪連峰縦走 (黒岳・トムラウシ山)	中村 雅明	25
三月会通信		32
編集後記		39
表紙写真Ⅱエベレスト(左端)を望む 撮影・岡田健志		

発行日 2011年2月1日
発行者 針葉樹会
(会長 竹中彰)
印刷所 ヤマノ印刷㈱

針葉樹会報 第 120 号

編集人 小島 和人
〒241-0817
横浜市旭区今宿 2-60-1
会報幹事/小島和人、井草長雄
川名真理

鎮魂の山旅

佐薙 恭 (昭31年卒)

あれから5年経った。2005年8月、山岳部同期の石和田、春日井と私の七十男3人は富山から入山し、太郎平から黒部の谷を渡り雲の平へ、そして三俣蓮華、双六を経て新穂高温泉口へ下山する6日間の予定の山旅に出かけた。雲の平は春日井の永年の憧れの地だった。途中で予期しなかったことが幾つか起った。その一つ、入山5日目、雲の平山荘を出る朝、春日井が胃の不調をうったえたのだが、自他共に最初それは軽いものだと思っていた。しかし症状はその後急速に悪化していった。2日後の最終行程、鏡平からの下山途中に偶然登ってきた岐阜県警山岳警備隊員、そしてその追加メンバーに彼は遭難者として担がれ岐阜県神岡の病院に運び込まれる事態になってしまった。入院してから3日後、彼は身内の方々に見守られながら神岡の地で帰らぬ人となった。同期仲間の山行であり特に私がリーダーというわけではないが、山行

立案者としては何故こういう最悪の事態を避けることができなかつたのか、そのことが私にとって重い、つらい課題として続いていた。

ここ数年、TVなどで時々耳にする「千の風になって」という歌がある。ひよっとすると彼の御霊も北アルプスのどこかで風になっているのかもしれない。いま彼を偲ぶ最良の方法はあの辺りの稜線の風にわが身をまかせることではないだろうか。そう思い立って今年の夏、あの時とは逆コースで新穂高温泉口から折立までを歩くことにした。自分の今の体力を考え、雲の平に行くには2度必要となる黒部源流の登り下りを避け、その代わりに黒部の谷をへだてて雲の平と平行する黒部五郎岳の尾根伝いを進むプランとした。今回ただ一人の同行者としてザツクの中に春日井の山姿の写真を入れた。2003年の夏、彼と私2人で燕、餓鬼、唐沢と歩いた時、唐沢岳の山頂で私が写した写真だ。彼の翌年の年賀状にはこの写真が誇らしげに使われていた。

8月22日

5年前の出発日と同じこの日、私は早朝横浜の自宅を発ち、JRとバスを利用し正午少し過ぎに新穂高温泉口のバス停に降り立った。あの時春日井は一般車の入れない林道終

点からここまで警察の車で運ばれ、ここから救急車で神岡の飛騨市民病院に向かった。遅れて着いた私と石和田はこの派出所で県警の救助隊員から職務質問や今後の手続きの指示を受けた後、タクシーで神岡に向かったのだ。

バスを降りて私はすぐ前にある派出所のドアを開けようとしたが鍵がかけられていた。あの時の警官が今も同じ場所で勤務してはいないだろうとは思っていたが、せめてあの時世話になった警官たちの消息を知りたかったのだ。やむを得ず、今宵の宿、わさび小屋に向かった。日曜のせいもあり沢山の下山者が行き交った。夕方救急車がサイレンをならしながら小屋まで登ってきた。下山中疲労困憊となった病人風の一人の高年登山者とその同僚を収容していった。あの病院へ向かったのだろう。大したことでなければよいが。

8月23日

今日の予定は双六小屋まで。今回のコースは05年のほぼ逆コースなので、あたかも以前読んだ小説を最後のページから読み直すような形である年の出来事が思い起こされてくる。今日の行程は05年の山行7日目の後半と8日目、春日井が自分の胃の異常を雲の平で

自覚してから2日目の後半と3日目をたどることになる。行程の半ばにある鏡平山荘が彼にとって生涯最後に泊まった山小屋となった。三俣蓮華の小屋から普通なら昼ごろ通過している筈の鏡平に漸くたどり着いたのはもう夕方だった。その日の朝から彼が弱っているのは明らかで、彼はずつと空身だったが少し歩くと腰を下ろし横になってしまう。私は心苦しくもきつい調子で「おい、起きろ、行くぞ」と繰り返し返さざるを得なかった。もう1週間前なら主要な小屋には診療所が開かれていたのだが、もし医者が詳しくこの時点で彼を診察したなら、恐らくヘリによる緊急救助ということになったのだろう。

8日目、鏡平からの下りは更に牛歩になっていた。正午少し前、休暇で登ってきた岐阜県警の一人の警察官が我々パーティの異常を見抜き、そこから彼は遭難者として扱われ救助されることになった。最終的には急遽、下から呼ばれた追加3人の救助隊員の背に彼は代わる代わる担がれていったのだった。

実は05年の山行では入山5日目を以降、我々3人のうち、健常者は私だけだった。3日目、もう少しでその日の泊まり場、薬師沢小屋に着くという辺り、石和田が段差2mほどの上からつまずいて頭から落下、全身を強打してしまった。見かけの外傷や骨折はなかったが

身体に痺れが残った。

翌朝、石和田の体調を考え、引き返すか、進むかの相談をしたのだが、全員が引き返す場合の春日井の無念さ、パーティを分け単独で進むことへの春日井のためらいを思い、石和田は「ゆっくり行けばなんとかかなりそうだ」と発言、前進することになった。しかしその後の石和田の歩行は万全からは遠かった。痺れはずつと残り、バランスは悪く何回か転んだ。ストックは握れず、箸もうまく使えなかった。残りの行程、特に春日井の体調が悪化してから、石和田は自分自身の体調不良と戦いながらよく頑張ったと思う。下山後も痺れは残り、頸椎の手術を受けたのだが今も彼は自称「五体不満足の男」である。

この日、私は鏡平を過ぎてから、強烈な日差しや暑さ、急登で苦労はしたが、1200mの高度差を何とかこなし、早朝スタートのおかげでやや遅い昼食時間までには双六小屋に着いた。槍・北鎌、鷺羽などが圧倒的だ。しかし私にはやや遠く、地味な餓鬼、唐沢の山並みが懐かしい。あの時、餓鬼小屋での一夜はお客が春日井と二人だけ、静かな山だった。ここ双六は交通の要衝であり宿泊客も多い。団体客の一人に「どちらから？」と聞く。「昨夜は雲の平」という返事だった。この2日後、太郎平小屋で同じ会社の団体客の一

行がやはり雲の平を目指していた。我々の若い頃秘境といわれた雲の平も今では団体客の人気スポットとなっているようだ。

8月24日

この日の行程は双六と三俣蓮華の山頂を越え黒部五郎小屋まで。高度差は300mほど、コースタイムは僅か4時間だから半日仕事なのだが小屋の配置上やむを得ない。他の登山者と会話を交わしてみると、かなりの人が車で来て飛騨側から入り、笠、鷺羽、水晶、黒部五郎の四つの深田百名山を独自の組み合わせで3泊ほどで廻り、また飛騨側に下山していくようだ。後期高齢者の私には出来ない発想だ。この日も双六で同宿だったパーティが三俣から鷺羽を往復してから黒部五郎小屋までやってきていた。

前日、弓折乗越の急登中、両脚太腿の裏の筋肉が攣り、すこしばかり苦戦をした。午後小屋で横になっても時々痛みが走った。そこでこの日の起床時、先ずは漢方薬「ツムラ68」を口に入れ、「レッドキック」を太腿の裏に摺りこんだ。「レッドキック」は今ほなき山本健一郎兄が使い始め、一気に中高年の仲間内に常用者が増えていった。山歩きの途中、通行人の目を気にしながらズボンを下げて大の男がこの薬を摺りこむ様は滑稽ですらあり、私

はいつも冷やかす側だった。私も非常用に携行していたが使ったのは今回が初めてだった。匂いやべたつきが好きにはなれないが、今回の行程を安全確実にこなすためには仕方がない。

双六、三俣は高校時代以来数回歩いているが、この辺りには巻き道も複数あり、今まで双六の三角点に触れたことがあったのかどうかはさだかでない。05年の時は同行二人の体調から、一番下の巻き道を歩いたので双六の山頂は踏まなかった。

もしかしたら初めてかもしれない双六の頂上から少し進むと、突然道の真ん中にライチョウの親子5羽が現れた。親が少し高い場所位置して私の動きに目を配り、道の中央にいる4羽の子供たちに小声で警戒のサインを送っているようだ。しばらく観察を続けたが道を空けてくれないので、「こめんよ」と声を出して歩き始めると、子供たちはハイマツの中に消えていったが親鳥は動かずに私から目を離さなかった。そういえば05年の時は雲の平でやはり5羽の親子に出くわした。春日井にとつては久しぶりのライチョウ、彼がデジカメで捕まえた記憶がある。

三俣蓮華の頂上からは春日井にとつて最後から二番目の山小屋、三俣山荘がすぐ下だ。目でたどっていくと、彼と石和田が飛び石伝

いに苦労して渡った黒部源流、その先、崖の上の高台があつた雲の平、そして平の中央にレンガ色の屋根の雲の平山荘が望まれる。この小屋での朝、彼は胃の異常を初めて私たちに話したのだつた。

予想通り黒部五郎小屋には正午前に着いてしまった。双六小屋で求めた弁当をつまみに小屋の前のベンチで生ビールで喉を潤し、のんびりと午後を過ごした。

8月25日

今日は黒部五郎岳を高度差500mで越え、その後長い稜線歩きで太郎平小屋まで、コースタイム約7時間、高齢者には歩きでのある一日になりそうだ。起床直後、前日同様「ツムラ68」と「レッドキック」の世話になる。

現役4年の夏、鋸沢合宿の後、槍まで縦走した。その時、今日これから登る黒部五郎のカールの雰囲気は何とも素晴らしいと感じ、いつか再訪したいと思っていた。縦走メンバーのうち、同期の吉田リーダー、1年生の山田、両兄は今や故人だ。両兄との係わり合いなどを思い出しながらゆっくりと登る。肩までノンストップ、ここでザックを置き、空身で戻り気味に頂上を往復する。この日少し先行した登山者は途中雪溪の上で遊ぶクマを

見たと、後でデジカメの画像を見せてくれた。山頂からは雲の平の向こうの水晶の男性的な山容が魅力的だった。行く手の薬師も連日巨大な姿を見せていた。ここからはゆるやかな上下を繰り返す長い尾根をたどり、午後2時過ぎに太郎平の小屋についた。道中人影はまばらで、行き交った登山者の数は一桁だった。道連れはクマではなくホシガラスやイワヒバリだった。約9時間のアルパイトだった。

05年の時は富山のビジネスホテル泊の翌朝、タクシーを利用、折立から歩き始めこの小屋泊の予定だった。ところが早朝小雨の中、タクシーで有峰林道のゲートに着くと、前夜からの雨量が制限オーバーで車は通行止めとなった。やむを得ずゲートから約4時間、雨の中予定外の林道歩きをし、それまで存在を知らなかった有峰ダム湖畔の公営・有峰ハウスに宿を取った。3日目、折立を経てこの太郎平には正午前に着き、春日井が先頭で薬師沢小屋に向かった。3人はこの時点では至極元気だったが、約2時間後に石和田の転倒が起ってしまった。

8月26日

今回自宅を出る時、太郎平からは薬師を往復するプランだった。しかし双六から黒部五郎を越えての長い尾根歩きの途中では、薬師

の大きな山容に多少の怖じ気を感じ始めていた。天候など何か理由を見つけて登らずに下山してしまおうかとも考えた。しかしここまで来たらやっぱりプラン通り登ろうという気持ちだが前夜固まった。もうここへ来ることもないだろう。天気も相変わらず好天のようだ。脚の痛みも消え今朝は葉を使わない。

遠くからだと巨大な薬師だが、ここから山頂までの高度差は600m、日頃日帰りで歩いている丹沢の半分だ。快調にノンストップで登り、山頂の薬師如来像に参拝、大休止。黒部五郎と共に、55年ぶりの再訪だった。11時前には小屋に戻った。昼飯は春日井の分と合わせて二人分の生ビール。その後は黒部源流からの風に吹かれながら、ここ数日同宿で同じコースを歩き顔なじみになった登山者と会話を交わしたりして、山中での最後の午後を小屋の前のベンチで過ごした。

8月27日

今回のプランでは入山時の交通事情はしっかり調べたが、下山時については予習してこなかった。5年前同様、8月の今頃は富山・折立間のバスはもう無く、小屋でタクシーを予約してもらい出来れば有峰口あたりの温泉で一浴というつもりだった。ところが太郎平に来てみるとまだ直行のバス便が一往復あり

折立発11時という。それならこれを利用しよう。

途中下車は出来ない便だという。風呂は富山駅近くで見つければいい。風呂は富山駅近くで見つければいい。

春日井は自転車で何年かかけてシルクロードを走破したサイクリストだった。そのせいか、登りの脚力は仲間内で抜群だった。しかし下りとなると何故か速度はがた落ちになった。私は下りのとき、「おい、お嬢様」といつもからかっていた。「自転車では下りは漕がないからさ」というのがあまり筋の通らない彼の言訳だった。下山口にタクシーを予約する時など、彼は十二分の余裕時間を加えて予約時間を決めていた。

今日は背中の写真の春日井の気持を慮り、たつぷりとした余裕時間を加えて早々と下山の途についた。途中、今回初めて白山の大きな固まりが左手遠くに見えてきた。03年9月、彼は針葉樹会員数人とあの山に登っている。更に下ると右手やや遠くに立派な岩峰。双眼鏡で確かめると剣だった。一緒に合宿で過ごした山域だ。この日は金曜日のせいか、登ってくる人が結構多い。もうバスが着いたのかと気になり「バスですか？」と聞くと「電車とタクシーよ」という返事だった。

折立に着いた時は充分の待ち時間があつた。トイレ、自動販売機、無人の休憩所があ

る。やがてバスが数人の登山者を乗せてやってくる。11時10人ほどの下山者を乗せてバスは富山に向けて動きだした。運転手の簡単な説明では富山着は14時30分頃だという。随分時間がかかるのだなとちよつと思議な気持ちになる。バスはすぐに有峰ダムの湖畔へ。あの時やむを得ず泊まった有峰ハウスや、春日井が会社時代の仕事の関係で興味を持ったダム記念館などを過ぎる。バスは何故か我々が雨の中4時間かけて歩いた林道の方に行かず、ダム西岸の道をダムの南端まで走り、そこから奥深い山道を登っていく。正午過ぎ、軽食タイムとしてバスは山奥の人気の少ない施設に止まった。ここで運転手に事情を聞く。説明では我々が歩いた林道は富山まで一番近い道なのだが今年は大規模な崖崩れで使えない。もう一つの富山に近い道は大型車がすれ違えない。やむなく大回りして行くのだと。軽食タイムの場所は岐阜県飛騨市山乃村牧場という所だった。

軽食タイムの後、しばらく山奥を走りやがて国道に出る。何気なく道路標識を見るとバスは何とあの神岡に向かっている。神岡！春日井が人生最後の3日間を過ごした町だ。目を凝らして通り過ぎていく神岡の町並みを見る。高原川から遠くない所に間違いなく飛騨市民病院の建物が見つかった。思わず合掌す

る。全く予期しなかったことだった。
バスはその後、長い時間をかけて富山駅前に着いた。駅近くの銭湯で汗と垢を洗い流し、春日井の写真を背にした私の2010年夏の鎮魂の旅を終えた。

雲南省怒江峡谷の秘峰

(2010年10月)

中村 保 (昭33年卒)

雨季の雲南四川踏査は12年ぶりである。ブルスカイの山を望むチャンスはないであろうが、二つの欲張った計画を立てた。

第1ステージでは、①雲南北西の陸の孤島、独龍族の住む独龍江(イラワジ川源流部)流域の踏査を行い、あわせて帰路に雲南の秘峰カワカブの情報を集め、怒江(サルウィン川上流部)流域のキリスト教会を探访する、②昆明で雲南省の登山許可について雲南省体育局の責任者と会談することとした。

第2ステージでは四川西部高地・理塘高原の緑豊かな美しい夏の景観を楽しみながら沙

魯里山系の相丘切克山群の探査と理塘高原のピーク同定の情報集めをすることであった。結果は、雲南では異常気象による水害の危険のため独龍江へは入れなかったが、カワカブの情報、教会探访では多くの収穫があり、雲南省の登山許可についても有益な情報を得た。

四川では理塘高原横断の馬のキャラバンはできなかったが、未踏峰の写真を撮りピーク同定の材料を持ち帰ることができた。

雲南と四川の部2回に分けて投稿し、四川の部・理塘高原―沙魯里山系のピーク同定は次号に掲載させて頂く。1回目の雲南紀行では「秘峰カワカブ」と「キリスト教会探访」の二つに絞って掲載させて頂く。

ゴンパ・ラはいずこ

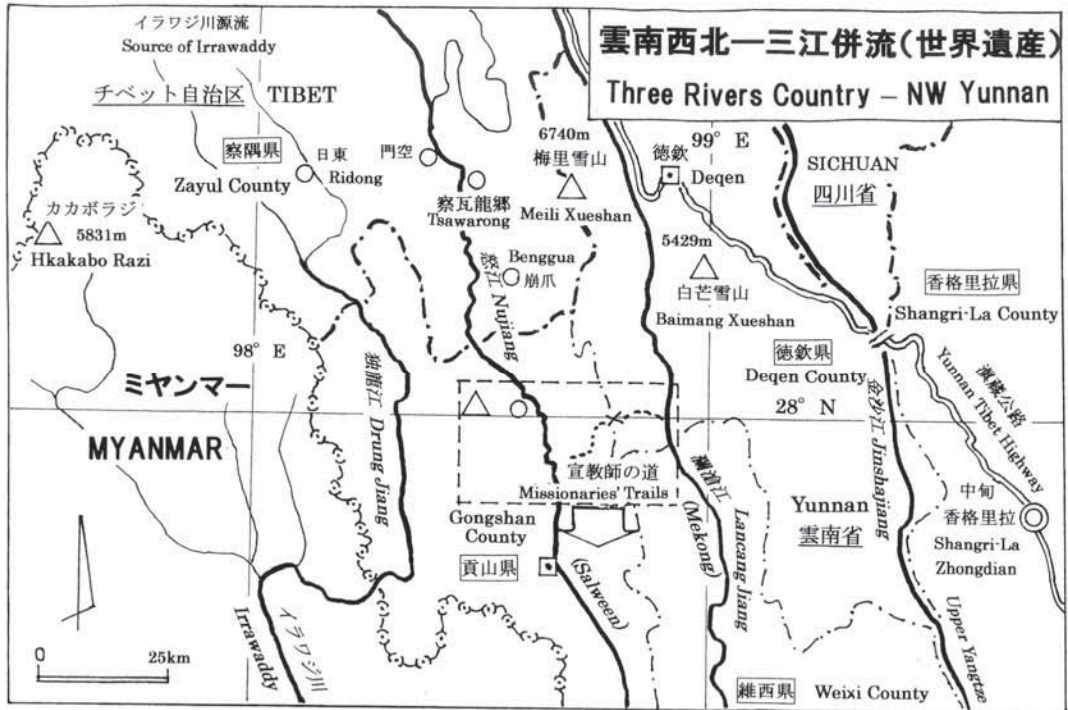
——幻のカワカブ5128m

2010年7月、独龍江踏査にあたりどうしても確認しておきたいことがあった。プラントハンター、F. キングドン＝ウォードが1922年10月に外国人として3番目に怒江(サルウィン川)から分水嶺の高黎貢山を越えて独龍江へ入り、北ビルマのプタオ(Fohn Hertz)に至った。ちなみにキングドン＝ウォード以前に東から独龍江に入ったのは1895年のフランスのドルレアン公の隊

(From Tonkin to India by the sources of the Irawadi January 95-January '96 Prince Henri d'Orleans, London 1898) と、1906年の英国人探検家E. C. ヤングである(A Journey from Yun-nan to Assam, The Geographical Journal, August 1907 Vol.30 No.2)。

分水嶺を越えるルートは4つある(あった)と言われる。キングドン＝ウォードが越えたのが「ゴンパ・ラ(Gompa La)」で、その位置の特定に難儀していた。キングドン＝ウォードの紀行 From China to Khamti Long (Edward Arnold & Co. London 1924) を丹念に読み直し「ゴンパ・ラ」こそ幻の秘峰カワカブであることを確信した。彼は頂上には立っていないが、氷河をさけて険しい岩道を辿り分水嶺を越えている。近年ではスコットランドのプラントハンター、マイケル・ウィッケンデンが2000年の夏にゴンパ・ラを越えてピークの写真を撮っている(Exploring The Upper Dulong River-The KWL Expedition to North-West Yunnan, September-October 2009)。

私は1996年の梅里雪山巡礼路一周の時に北面を遠望し、2004年にカトリック宣教師の道を辿ったときに東面の全容を写真に収めた。私の知る限り、谷間から仰いだ写真は別として、カワカブのプロファイルの写真はこれらの3枚だけである。



「幻の秘峰」と表現したが、このピークが僻遠の地にあるわけではない。サルウィン川(怒江)流域、雲南省とチベット自治区との省境に近い貢山独竜族怒族自治県の最奥の町、丙中洛の西側、サルウィン川の右岸に聳える5128mの岬々たる双耳峰である。辺境は急速にインフラ整備が進み道路は舗装され街は現代的になりつつある。サルウィン峡谷の奇観を観光開発に役立てている。その意味ではもはや秘境と呼べる場所ではない。にもかかわらず、カワカブは登山家の目からみると知られざる山である。

標高は5128mで低いこともあるが、晩秋を除いてはいつも雲に覆われていて見えなことも影響している。高黎貢山のこの辺りは雲南では最も降雪量の多い地帯でわずか5000mの山に氷河が存在し、分水嶺の峠は5月末まで雪で閉ざされる。地勢と気候条件がカワカブを秘峰にしていると云えよう。

カワカブの標高について触れておこう。キングドン・ウオードは1911年の踏査行を名著『青いケシの国』(白水社 ヒマラヤ人と辺境) 3 倉知敬訳 1975 原書は *The Land of the Blue Poppy* (中) の “Ke-ni-chun-pu (over 20,000ft)” と地図に記載している。そのときは6000m峰と判断したようだ。しかし1922年の雲南からビルマへの

横断の旅では、ゴンパ・ラの峠13,000ftから17,000ft(5182m)と推定している。現在の標高に近い。

National Geographic から1920〜30年代に数度にわたって雲南・四川・青海の踏査に派遣され、後に麗江に住み納西族の東巴文化の研究に傾注したブランドハンターのジョセフ・ロツクは1923年10月にカワカブを望見しているが、彼はキングドン・ウオードと同じく *Kenychunpo* (over 20,000ft) と地図に記している。実際は5128mの高さに過ぎないが、サルウィン河畔の丙中洛からは3500mもの高度差があるので高く感じたのであろう。他にはないカワカブの写真と探検家の地図・現代の地図をご覧頂きたい。ゆっくり偵察したい吸引力のある「秘峰」である。(編集部注) スペースの都合で省略した写真・図版は一橋山岳会のHPの「ヒマラヤの東」のコーナーに掲載してあります)

キリスト教会探訪

―プロテスタントの新しい風

独龍江入りを断念した後、7月12〜18日の1週間、盛田さん・鈴木さんとサルウィン川(以下怒江と記す)流域の教会を精力的に探訪し、この地におけるキリスト教の普及の状況を取材した。カトリックの衰退とプロテ

スタントの隆盛が印象的であり、新しい発見であった。以下日記風に綴る。

(注記：中国では、プロテスタント＝基督教、カトリック＝天主教、経堂＝教会)

カトリック＝天主教、経堂＝教会)

7月12日、貢山、曇後薄日、7:00 20℃、標高1525m

独龍江を諦め、タ方リス族の基督教経堂に行く。貢山のプロテスタントの信仰の中心である。教会の前の広場で大勢のリス族がダンスの練習をしていた。

重丁カトリック教会

7月13日、貢山、曇、7:30、20℃、1520m、丙中洛着 12:30、1760m

重丁経堂訪問、6年前に会った経堂の鍵を預かるチベット族の女性が来てくれる。元気な笑顔が懐かしい。フランス・ローマン・カトリック、パリ外国宣教会(MEP)の任安守神父の墓の写真を撮る。荒廃が進む天主教の教会の中では元のデザイン通りに新築なった重丁経堂はよく整備されている。

カトリック弾圧の拠点であったラマ寺・普化寺(整備中)も訪れる。直ぐ近くの東風基督教経堂も見る。その後、観光地図にある「香巴拉遺跡」に行こうとしたが、村人は誰も知



宣教師の道——白漢洛とパラゴン峠の中間地点からの遠望
(2004年10月、中村保撮影)

らなかった。途中、これも地図にあるカワカブ(5128m)展望台についても村人に尋ねたが知らなかった。ただ一人の熱心な村人がカワカブへの情報を提供してくれた。氷河の末端までは徒歩で往復1週間かかる、悪路なので馬は使えない、人夫は1人50元/日で集められるということだ。

このトレイルは「青いケシ」で名高い英国

のブランドハンター、F.キングドン・ウォードが1922年10月に雲南から北ビルマのイラワジ川支流の上流フオート・ヘルツまで旅するために、丙中洛の少し北からカワカブ(キングドン・ウォードのゴンパ・ラ)の近くの峠を越えて独龍江(イラワジ川本流の上流部)に入った。その時、彼は任安守神父のアドバイスを受けている。ゴンパ・ラ越えてキングドン・ウォードは大変な苦勞をしている。

秋那桶の天主堂

7月14日、丙中洛、7:00、20℃、前夜から雨、終日雨止まず

察瓦龍への自動車道を北上、石門関(キングドン・ウォードのマールブル・ゴルジュ)を過ぎチベット自治区との省境の手前の峡谷地帯まで進み引き返して秋那桶(1800m)に行く。自動車道は3年前と比べて相当荒れている。怒江は急激に増水していて流れは恐ろしいほど迫力がある。秋那桶へは怒江左岸の谷に入る。ボンガ経堂跡、阿丙への旧道沿いにある。最近では中国人の観光客が訪れるというが、特に美しい景観でもない。有名な秋那桶の天主堂は荒れていて失望した。

秋那桶から徒歩で車道を上り、嘎卡当(ガタン 1940m)の小学校で昼食、さら

に自動車道の終点、初干(チヨカン 2040m)の天主堂を訪れる。この谷最奥の教会である。村は24家族、160人ですべて怒族、80%がカトリック信者である。初干からボンガまで峠を越えて徒歩で4時間、阿丙まで8時間という。アル中気味の天主堂管理人は徳欽のチベット族で74歳、代々カトリックで父は任安守神父の案内、お供をしたと言う。帰路、怒江沿いの尼大当(ニダタン 1570m)の建築中の教会を見て丙中洛に戻る。

迪麻洛のカトリック教会

7月15日、丙中洛、朝霧、後雨、7:00 20℃。雨は午前中に止み暑くなる

怒江左岸へ、平安棒当経堂(1560m)を訪れ、この日の目的地、迪麻洛(デマロ 1840m)に行く。2004年に永井さん、陳少宏と一緒にメコン川沿いの茨中から怒江へ、分水嶺のシ・ラ(4170m)を越えてカトリック宣教師の道を4日かけてキャラバンしたときの馬方のリーダー・阿洛さんを訪ねた。彼はチベット族のカトリック信者で、地図を読める実に優秀なガイドでもある。今では丙中洛に拠点を持ち、迪麻洛では民宿を経営、観光開発や自然保護の仕事にも携わっている。自らも怒江・独龍江流域のガイドもしている。2004年の旅のことはよく覚え



重丁カトリック教会の庭にある任安守神父の墓、
左から中村・盛田・鈴木

てくれていた。美人の奥さんにも再会できた。次回の独龍江入りの時は彼にガイドを依頼する。迪麻洛の経堂も廃屋寸前のように荒れていた。

迪麻洛は12村、30000人、80%がカトリック信者で、住民はチベット語・英語・中国語の三つの名前をもっている。迪麻洛の後には同じ左岸の永拉嘎天主堂（1574m）に行く。2006年に再建、信者1000人のう

ち20人はまだ文盲であると言う。夕方、貢山に帰着、県の民生局を訪れ貢山県の地図を85円で買うことができた。県の地図を県政府から買うことができたのは初めてのことである。

貢山のカトリック教会

貢山の天主教に行くが、このお伽の国のような経堂も6年前と比べて老朽化が目だった。何故だろうか、プロテスタントの基督教経堂の新しい教会が増えているのにカトリックの天主教は衰退しているように見える。その理由は保山で知ることができた。

怒江流域におけるカトリックとプロテスタントの普及分布は、大別して貢山から北がカトリック、南がプロテスタントと言えよう。そして、プロテスタントの教会は地形的な影響から怒江右岸に多い。

六庫へ

7月16日、貢山、朝雨、T:30、20℃。六庫（860m）へ移動

雨が止んで陽が差し蒸し暑い。たくさんの教会の写真を撮る。福貢で昼食、六庫の手前ウエイラバで珍しく白い十字架の天主堂の写真を撮る。ちなみにプロテスタントの教会の十字架は赤である。気温32℃。六庫の市街地

の発展振りにあらためて目を見張る。3年前も大きな町になっていたが、さらに膨張し都会化しており、怒江下流沿いに新市街地の建設が進んでいる。新車があふれている。ホテルも混んでいる。物資も豊富である。亜熱帯性の果物が多様で、とりわけマンゴーが美味しい。何が辺境の谷間の経済発展の原動力になっているのだろうか。

7月17日、六庫、曇、T:30 24℃。保山（1680m）へ移動

六庫の南約30分、瀘水県上江郷、怒江右岸の百花嶺基督教経堂を訪れ管理人および教会ナンバー2の実力者（48歳）にインタビューする。以下要約する。

——百花嶺の村人は600〜700人（漢族は15人で99%はリス族）、教会の信者は300人であるが、この教会には近在の村も含めると1000人の信者が集まる。教会の420の座席はいつも一杯になる。瀘水県全体では教会は300あり、すべてプロテスタントである。上江郷だけでも52の教会がある。驚くべき数の教会である。

——現在の新教会は2003年に建設、建設費4万7000元は信者の寄付で賄った。2010年に屋根の改修をしている。神父は村の人で、創立者は現在84歳のリス族の老人

である。外国人の神父は来ないが観光客は結構来る。日本人も来る。教会は州政府・県政府の宗教管理局により統括されている。神父の後継者は村人の互選により決められよう。

——州政府はリス族の瀘水県百花嶺合唱団（雲南省で有名）の文化活動支援のため40万円を提供している。一方、教会は村人の寄付により運営されている。プロテスタント教会が増加している要因の一つに、リス族の文化を残すための政府による少数民族支援策がある。原始宗教から基督教へ、合理的思考へ移行するための啓蒙でもある。

——信者の数は、1947・48年には4000人であったが、現在は4万人に増えている。1947年には瀘水県には教会は二つしかなかった。基督教（プロテスタント）が怒江に入ってきたのはビルマ経由で1928年である。本格的に布教活動を始めたのは1936年頃である。新中国になり宗教は禁止されたが、1981年の開放改革以後宗教活動が復活、百花嶺教会では1980年には信者は20人しかいなかったが、現在は300人いる。増加の原因は原始宗教（迷信）からの脱却を促すことと政府の積極的支援による。上江郷の教会は州・県政府の規則・法令に遵守して運営されている。

——瀘水県の経済は、農業収入と出稼ぎ労

働者の送金によって支えられている。政府の経済的支援はない。農業ではタバコ葉の収入が一番多い。米、玉蜀黍、果物（マンゴー、桃、バナナ、胡桃、ライチ）、コーヒーも最近始めている。

保山市へ

午後早く怒江の谷から標高1960mのメコン・怒江分水嶺を越える新道をドライブしてメコン沿いの道を離れて昆明からミャンマー国境の町瑞麗に通じる高速道路に入る。高速道路を38km走って雲南西部の広い盆地の中の交通の要衝、保山に着く。豊かな土地である。近年急速に生産が増えているコーヒーは保山市の江流域で栽培されている。保山で車の旅は終わる。この日、保山基督教本部・学校を訪問する。飛び込みの訪問ながら親切に対応して頂いた。感謝したい。以下は事務局の説明である。

——保山市（州と同じ行政単位）の人口は260万人。教会は75あり、全てプロテスタントでカトリックはない。教会に来る信者は5万人、70%が漢族である。ここでは文革の影響は比較的少なかった。雲南省でプロテスタントの信者が一番多いのが保山である。

——教会本部・学校の活動資金は、寄付・

学校の授業料・宿舍費・政府の支援（A. 基本年10万円 B. 行事別スポット C. 外国からの支援・日本から30万円）により賄われている。学校の授業は、1年生は漢語などの基礎知識、2・3年生は法律など。学生は120人。外国人神父は10名、英国人など。外国人は神父も信者も日曜日だけ教会にくる。

——カトリック（天主教）とプロテスタント（基督教）の普及に差がついた要因は、1981年の開放改革後の両者の対応の違いによる。カトリックは消極的だったが、プロテスタントは積極的に活動し、政府ともタイアップしながら普及拡大に努めたためである。この説明で、貢山県の天主教の教会が少なくとも外観は荒廃し、教会の教も増えない現実を理解できた。

保山市は新興のコーヒー生産地（サルウィン川流域の亜熱帯気候）として世界のマーケットで認知されつつある。

南アルプス悪沢岳登頂

三井 博（昭37年卒）

南アルプスの悪沢岳は標高3141mの日本第6位の高峰である。私は当初榎島く赤石岳く荒川三山く榎島の毎日新聞旅行のツアーに申し込んでいたが、日程その他の事情により、単独で榎島く悪沢岳のピストン登山に変更した。

7月17日（土）

榎島宿泊。森林伐採やダム工場の旧作業者の部屋を改装した5く6棟の建物があり、食事も旨く風呂もあり快適であった。

7月18日（日）

朝早く出発するのが常識であるが、今日は千枚小屋までなので、レストハウスでモーニングセットを食し、弁当を持って7時に出発する。明石小屋方面の登山路を見送り、清見橋の手前を梯子を使って下り、4本の吊り橋を渡る。本日は快晴であるが、連日の降雨で



悪沢岳山頂にて

どの沢も幅いっぱいには滔々と水が流れ、恐怖感さえ覚える。最初に小山を乗り越すところがあるが、岩場の連続であり、赤いペンキを頼りに慎重に上下する。まもなく急坂を上ると林道を横切る。広い尾根道を木や岩に付けられたペンキやテープをたどっていくと、また林道を横切り細い山道を延々と登っていく。高度があがらず時間のかかること夥しい。巨大な樹木が行く手を覆い、展望は全くない退屈な尾根である。やっと11時30分に清水平という水場につき昼食をとっていると、上方から若い単独者がすっ飛んできて、林道の横切り箇所はあとどのくらいか聞いてきた。まだ大分あるよと答えると、どうしても榎島14時発の最終バスに乗らなければなら

ないと言って下っていった。

その後、やや急になった樹林帯の登山道をわき目も振らず登っていく。草原状の蕨段、悪沢岳が見える見晴台、じめじめした駒鳥池を経て、千枚小屋に15時に着いた。やれやれ8時間もかかってしまった。

7月19日（月）

千枚小屋の宿泊者は、荒川三山、赤石岳に登り、赤石小屋まで歩く人が多い。したがって午前3時ころからごそごそ動き出し、午前4時の朝食は小屋番の指示に従って椅子に座り、食べ始める。食事の内容はなかなかおいしい。ご飯・味噌汁のお代わりをする人が多い。さつさと食事を済ませ、歯を磨き、4つのトイレの前に並ぶ。トイレは各人工夫して前夜や朝早く処理するので、意外と混んではない。雲海に浮かぶ朝焼けの富士山をカメラに収めてから、4時50分に出発した。ヘッドランプは不要であった。急だが歩きやすい山道を登り、約1時間で千枚岳（2880m）についた。風が強い。

千枚岳まで登ると、南アルプス南部の山々が眺められ、目の前に赤石岳の大きな山容が迫力をもって迫ってくる。これから登る丸山、悪沢岳も立派だ。反対側には笹ヶ岳の双耳峰が見事だ。しかし、千枚岳は通過地点なので、

早々にして丸山に向かう。千枚岳から丸山の間は急峻な岩場が連続している。鎖もロープもないが、岩に付けられた赤いペンキにしたがつて、三点確保で後ろ向きに降りる。降りると狭い山稜になり、しばらくするとまた岩場が現れる。このようにして5か所の岩場を下降すると、丸山との鞍部となり、膨大な砂山のような丸山を登っていく。丸山（3032m）着 7時。

強風が何故か北から吹いてきてTシャツとカッターシャツでは寒いので、雨具を着る。これで落ちていて行動食のパンを食す。悪沢岳の登りは、大きな岩の間を登るところが多く、見かけほど大したことはなかった。8時悪沢岳（3141m）登頂。標識は荒川東岳となっていた。ここで20分ほど滞在して、千枚小屋に戻った。丸山から千枚岳への岩場は今度は登りになるが、慎重に処理し千枚小屋に10時半に着いた。往復5時間40分のピストン登山であった。

千枚小屋の管理人から樫島に降りるのならば、午前中にスタートしなければ駄目だよと言われていたので、一息ついて11時から下降を始める。問題なく下れるはずであったが、悪沢岳を登頂したことで、やはり気が緩んでいたのだろう。なかなかピッチがあがらない。あと1時間半との表示を見たのち、道に迷い、

赤いペンキ、テープを探してうろろろしてしまった。やっと時間をかけて林道を横切り、急斜面を降りて吊橋を渡り、小さな岩山を越すところまでできたが、昨日はすいすい越した小山がなかなか厳しく、やや暗くなってきたこともあり、赤いペンキを探しながら、必死になって道をたどった。やっと川沿いの歩道を歩いていると、前方にドサツという音がして二人連れの登山者が道でないところを下りてきた。やれ安心との気持ちで吊橋のところまで来ると、私に先に行ってくれと言う。4つの吊橋を渡り、樫島に帰着した。帰着時間は18時で、トータル13時間もかかってしまった。

7月20日（火）

樫島へ帰京。

『今は昔』の現役時代

踏椿会（村上泰介・本間浩）

1. 「60年安保」の年に入学した

本間 浩

我々が大学に入った昭和35年は、世に言う「60年安保」の年であった。今は政治家も我々もゆるみ、たるみ、草食化しているが、あの頃は守るも攻めるもエネルギーがぶつかり合った時代のような気がする。何時、誰がデモに参加するのしたのという話、2年生の後関さんが催涙弾をぶっつけられたとか、某活動家を密かに寮に匿ったとか、樺美智子が殺されたとか物騒な話が飛び交い、山岳部員もそれなりに関心を持ち、動いたようだ。後述するようにその結果が後々まで尾を引いたケースもあったであろう。

ただ山岳部の行事（合宿）は、外の空気に惑わされることなく、正に肅々と行われ、合宿中は勿論、小平・国立を問わず部室でも、喫茶店でも専ら山の話で、その手の話は格別話題に上らなかつたような気がする。もつと

も私は、小平の寮でデモに参加しなかった二人のうちのひとりであり、その手の話は私を避けて通ったのかもしれないが。或いは、小平は騒いだが国立は平穏静謐だったのだろうか。何はともあれその後の動きからみて、一過性のものであったことは否めない。

そのような世の動きを背景にして、5月連休の「仙丈・甲斐駒」から合宿が始まった。グループで、重い荷を担ぎ、テントに数泊し、高い山に登るといふ、私にとっては初めての本格的登山だった。中川さんをリーダーに有賀さん、朝木さん、後閑さんそして1年生の蛭川・中橋・名和・長澤・本間と5人。この5人に、次の谷川合宿で竹中が、11月の富士山合宿で村上が入部し、踏椿会（トーチン会）が出来上がっていった。

戸台川で、顔を洗いますと称してコソソリ水を飲んだこと（昔は水とヤツケはリーダー命令でのみOKでしたが、今は飲め飲めで、様変わりです。どちらが正しいのでしょうか？）、八丁坂の登りのキツカッタこと、北沢峠の川のそばのテントでセセラギが気になつてなかなか寝つけなかったこと、こんなことは覚えているのに、肝腎の「仙丈・甲斐駒」は何も覚えていないといういい加減さ。

次は6月の谷川。仰向けになって、青い空を見ながら滑るときのあの感覚、早くストツ

プを掛けてくれと叫びたくなる不安な気持ち。マチガ沢を詰めた時振り返って見た急斜面の雪溪の怖さ。一の倉沢で、岩登りの人影が朝来た時と午後帰る時と場所が動いていないあの岩壁の凄み。荷も軽いし、歩く時間も長くない、部員全員が集まる楽しい合宿でした。

夏。本格的な合宿。オラオラ、手前ら甘えのお時間はお終いだ、というわけです。一橋ですから、シゴキがあったわけでもないのですが、生まれて初めて40キロ以上の荷を担ぐわけです。兎に角キツカッタとしか言いようがありません。途中から雨に降られ、梓川沿いに腕にシビレを感じながらトツプの足元だけを見て、正にトボトボと歩き続けた初日。二日目涸沢のテント場に着き荷を下ろしたときに思わず出た涙。グルリと周りを見上げれば穂高の山々、今自分は丁度スリバチの底にいます。というあの何とも云えない奇妙な不思議さ。北・奥・前穂に、帰りのグリセード、入山時と違い疲れも感じず、岩歩きに恐れも感じず、車座になって岩の上に腰を下ろしての食事、お替り3杯目でヤツト安心して食事ができる腹の減り加減、なんとも楽しい時だったと思います。

改めて『針葉樹』を練って見ると上級生にいろいろな所に連れて行ってもらったんだ

と、感謝の念が湧いてきます。涸沢入りの翌日、石さんとザイテンから前穂を廻り三・四のコルを下り、この時だったと思います。グリセードの出来ない長澤にザイルを何本も巻き付けて下ったのは。山本尚禎さんには、三日間も連れて行ってもらってます。昔を思い出すと、今でも挙げられない頭がマスマス下がります、カナワンドスよ。

この夏合宿だけ参加の部員も何人かいました。熊谷弘、衆議院議員で大臣も務めたかと。政治家を目指すには山は余計だったのでしよう。山本靖彦、入山時の腕の痺れがナカナカとれず1ヶ月月位通院していたと思います。そしてそのまま部屋にも来なくなりました。吉川勲、名前は記録にあるのですが、集合写真には載ってないし、どうも思い出せないのです。国税庁関係に勤めた？とも聞きましたが。後半の縦走、私は不参加だったので、中川リーダーの記録をお借りします。

「1960年7月25日 テント場く中尾峠く槍見温泉。中尾峠の登りという槍見までの下りといい、意外な時間をくってしまつた。前方の笠の雄姿が歩くたびに高くなつていき、明日あれを登るのかと思うと気が重くなった。蛭川は靴ズレをひどくしてここからバスで下山と決まつた。本人はうれしいやら

くやしいやら、複雑な心境であった。残る他の一年生の顔はこれまたうらめしうらめしもうり平気そうでもあった。」

蛭川の心境が良く理解できません（私も前半定着のみでしたから）。小平の寮で4〜5日経つと今皆は山にいらんだと意識しだし、自分には山岳部らしく朝日連峰を越えて田舎（山形県鶴岡市）に帰ろうとなつたわけです。楽しい思い出です。

秋合宿。北（針ノ木岳〜朝日岳）と南（三伏峠〜光岳）に。北には中橋と伊藤重道（通称、熊）が、南には蛭川が参加。伊藤熊さんはこの合宿から参加。バテたことがないという人がいます。所謂殺しても死なないというタフなタイプが。我々の代では彼がそうでした。適度に世慣れていて、適度にスケベで愛嬌があって。この後、冬・春と合宿にはよく参加していましたが、翌年剣の夏合宿を最後に現れなくなりました。多分、「代々木」のほうに行つたのではないかと思えます。山登りにピツタリな奴と思っていました。最近亡くなつたと聞きました。「冥福を祈ります。あと印象に残るのは、門田衛士。合宿参加は、2年時の谷川と剣の夏合宿ですが、大きな（健二郎、昭37卒）と似た野太い声が印象



前列左から 蛭川、本間、 後列左から 竹中、長澤、村上。

的でした。共同通信だったかな。

冬と春の積雪期の合宿、私は不参加でしたので、機会を改めてどなたかに語ってもらおうのが宜しいかと思えます。

1年時の時の忘れられない行事は、やはり「アドレス遠征」です。皆さんもうお忘れでしょうが、1年生は多大の貢献を致しました。(1) 器具の耐寒冷実験のため、富士山の佐藤小屋近くのお中道までポッカしたこと。

(2) 旧如水会館の地下室で、運送用ダンボールのテープ張りをしたこと。

密室状態で、天井は低くラツカーの臭いが充滿した部屋での作業は酔いと戦いでした。後年シンナー遊びを聞いて、よく理解できました。

伊藤熊さんと作業した日、入ってくるや「吉永小百合はいいぞ、あれは大物になる」。映画を見ての帰りで、興奮今も覚めやらす、の体でした。小生映画も見えないし、どちらかと言えば「倍賞千恵子」でしたから、何とも。

今なってみれば、眼力がありません、伊藤重道には。

2. 登山はスポーツか

村上泰介

「そうだよ、スポーツだよ。山岳部はスポーツアルピニズムなんだよ」と高校山岳部で同期だったKは言う。彼は早稲田に入学すると同時に山岳部に入った。「しかし、山岳部は文化祭に顔を出すよ、高校でも大学でも。少なくとも体育会系でないことには間違いないよ」と私が言葉を返す。Kと私の50年前の間答だ。

同じく高校山岳部同期のT(わが竹中会長)も一橋に入ると暫くして山岳部に入ったが、私は折角希望の大学に入ったのだから少しは勉強もしたかった。しかし当時は一橋でも授業そつちのけで学内で盛り上がっていた安保闘争も岸首相と榎美智子さんをスケープゴートにしてあつげなく終わり、そうこうしているうちに早稲田の山岳部が富士山合宿で雪崩にまきこまれるという事故が起こった。11名もの死者が出た。重傷とはいえKは助かったが、彼と親しかった同期部員が死んだ。板橋の日大病院にKを訪ねると、「しばらく山は嫌だ」と言う。「そうか、では代わりに僕が登ろうか」と半年遅れで山岳部に入った。

考えてみると高校山岳部では事故はほとんど気にならなかった。初めてアイゼンを着けて登った立山や一の越から天狗小屋までの雄大な滑走を楽しんだ5月の連休のスキーでも、針ノ木から平の吊橋を渡って(黒四はまだ無かった)立山へと縦走した夏山合宿でも、涸沢から新雪の奥穂に登った秋山でも、梅池から天狗原を経て白馬をめざした冬山でも事故らしい事故はほとんど無かった。

ところが大学に入ると少なからぬ事故に遭遇した。われわれの時代の最悪の事故は3年生の夏山で起きた同期の名和の滝谷4尾根での滑落事故だった。さいわい一命をとりとめ長い昏睡から覚醒したものの卒業も就職も結婚も出来ない終生の身障者になってしまった。この夏山に参加しなかった私はもし参加していたら私だったかも知れないとの偶有性からくる自責の念を今も感じている。この名和の事故の前には爺での三井さんの、この後には奥穂での中橋の滑落事故があった。アンデス遠征の輝かしい成功の前後である。

又、我々の事故ではないが、他のパーティーの事故にも多く遭遇した。富士山では重症の法政山岳部員を担いで井上小屋まで降りる途中急に背中が軽くなったことがある。剣のチンネでは飯田長姫高校の山岳部員が大きな音を立てて墜落死した。又、ドーム稜では社会

人山岳会の事故救助の応援から三の窓のテントに戻る途中、疲労困憊の余りシュルンドに落ちしばらく意識を失くしたことがある。寒さに身震いをして目を覚ました時に見上げた満天の星空は今も思い出すと身震いがする。

50年前の問いにそろそろ結論を出そう。登山は単なるスポーツではない。五輪の競技種目に入ることは決してない。登山は、生死の実感を失った都会人が、敢えて分母に死を、そして自らの生を分子に置く(つまり1÷∞)の極めて没社会的な行為であり、憧憬と冒険心、自負と恐怖心からなる一種の修養と修行或いはサバイバルゲームであり、確固たる死生観を持たない者にとつては時に取り返しのつかなくなる愚行である。

3. 思い出の山々

村上泰介

現役時代には多分年間100日くらいは山に入っていたと思う。その前後の車中を加えると120日にはなるだろう。つまり1年の3分の1は山行だった。しかし残念ながら関与の度合の少なかつた多くの山行はほとんど覚えていない。『針葉樹』13号の記録を読み返してみてもおぼろげにしか思い出せない。情けないことになんとか全体が思い出せるのは次の3つの合宿くらいしかない。

(1) 3年生の冬山の中央アルプス縦走は秋山でも偵察に行ったので覚えている。本来なら冬山に中央アルプスを選ぶことはなく、先立つ夏山の事故が原因でグレードダウンしたがための冬山だったが、結果的にはメンバーにも眺望にも恵まれて実に快適な、実に楽しい木曾山脈主稜線の踏破行だった。もっとも南駒からの下山路のルートファインディングは大失敗で、古い他パーティのつけた赤布にだまされてケサ沢に下りるルートを間違え、予期せぬ丸一日のロスが出た。しかし中央アルプスの高度と規模からして致命的なリスクが生じないことは明らかだったので特に危機感も無く、リーダーシップとPDCA (Plan-do-check-act) サイクルの勉強になった。八ヶ岳や中央アルプスの縦走はこうした訓練向きなかなと思う。

(2) 3年生の春山は横尾尾根から奥穂と槍への極地法だった。この合宿ではサブの竹中が膝の故障で途中下山をしたため、奥穂アタックのお鉢が私にまわって来たのでよく覚えている。キレットのA沢コルにテントを進めここから奥穂に登った。前夜の新雪のおかげで真新しいルートの13時間だったが、ザイル・パートナーが頑健かつ明朗

な小島君だったので大した苦も無く往復することが出来た。北穂北面の雪の大斜面で日没を迎えライトを照らしながら帰幕した。

(3) 4年生の夏山合宿、剣岳二股定着と棒小屋沢遡行も楽しい合宿だった。黒部には高枝山岳部の夏山で(当時、竹中父が黒四工事の富山側の次長だったので)阿曾原から樺平まで(だったかな)関西電力の隧道列車と巨大なエレベーターに乗せてもらった記憶が鮮明だ。後に小説となった吉村昭の『高熱隧道』である。棒小屋沢へは堰き止められた黒部の川底を渡ったが、映画、『黒部の太陽』にもなったこの黒四建設は実に壮大な事業だった。近年の中高年の登山ブームはこのアルペンルートの開発に触発されたのだと思う。

この夏山ではよく歌も歌った。今年5月、45年前のハンブルク大学留学時代の老友と出かけたドイツ感傷旅行の途中、1年後輩の佐藤之敏君をデュッセルドルフに訪ね何十年ぶりかの歓談をしたが、このときにもこの合宿の合間に近藤岩かどこかで彼の美声を聞いたのを思い出した。「ヘイヘイポーラ」だったな、確か。こういう昔話を彼はいたく喜び、大学山岳部の仲間でないところはいきませんねと

言って目をうるませた。余談ながら、完成したばかりの彼の大作、『最後の登攀』の話題でも大いに盛りあがった。この大作はドイツとパキスタンと日本という3つの空間軸と25年前と現在との2つの時間軸を交錯させながら、国際政治、宗教、歴史、登山等のテーマを散りばめた愛と友情の物語で、きたるべき多文化共生社会を予感させるいわゆる越境文学だが、針葉樹会の方々にもぜひ一読をお勧めしたい。又、叶うことなら公募の新人賞でも得て出版が期待される素晴らしい作品だ。

4. Sic itur ad astra

かくしこの道は星にまど

村上泰介

大阪の高校山岳部のころに榎有恒さん率いるマナスル登頂の記録映画を見た。8ミリフィルムの夏山の記録映画を中之島の公会堂へ見に行ったこともある。朝日新聞には井上靖の『氷壁』も連載されていた。東京では歌声喫茶で山の歌が流れていた。この時代には大集団による極地法の日丸登山から個人によるラッシュユ法の尖鋭な登攀まで出そろっていた。この頃の大学山岳部にはポーター部以上の夢があったと思う。そして、今にして思えばだが、山岳部のその後の方向づけにとつて非常に残念だった山行がある。今は亡き大さ

んが発案した幻の日高山脈縦走の夏山だ。もし実現していればこれを契機に一橋山岳部はより広い行動半径と近年Ｔ中さんが実践されてきたような方向性を持ったのではないだろうか。

ともあれ時代が豊かになるとともに大集団登山は無くなって全てが小集団登山に変わり、しかも小集団登山は少数精鋭による山頂派とその他を寄せ集めた山麓派に分かれていった。そして山岳部とは別に無雪期の低山を徘徊するワンゲルも出来た。私の居たころの一橋山岳部はまさにこの分派と多様化が始まる時代だったと思う。

さて前節で山行は余り覚えていないと書いたが、高校大学の山岳部時代を通じて山から学んだことは少なくない。否、その後の人生と長年の小企業経営を通じて見ても何かを学んだと言えるのはこの山岳部時代においてな、と言っても過言ではない。当時もその後も山岳部としても個人としても名だたる山にはひとつも登らなかつたが、その後歩んで来た道はビジネスであれプライベートであれ常に山行そのものであった。

数年前、非常勤となり経営の前線から離れたので高校山岳部の先輩でもある上原さんにならって地元の広島市立大学の大学院に社会



山梨県武川村実相寺山大神代桜の前で。
左から 蛭川、名和、本間 (2004.9.7)。

人入学をして応用言語学研究室に通つたが、ここでも山岳部時代の知見が論文作成に大いに役立つ。学位論文として精密な縦走記録や岩壁登攀報告と変わるところはなく、しかも墜落の危険は全くない。

昨年、在ジュネーブの愚息を訪ね家内どもどもシャモニはランデックからラックブランへのハイキングコースをモンブラン、グランドジョラス、ドリュエ等の素晴らしい景色を眺めながら三人で歩いてきた。この先、一切の社会的義務から解放されたら、出来れば程よい高さの山々に囲まれたインスブルックあた

りに愛犬とともに住みたいものだ、そして出来れば大学あたりで日本語の教師、否、ラーナーズ・アシスタントでもやりながら。

ともあれ遠い山、高い山に憧れた私の現役時代は「今や昔」の遠くに去った。翻つて現在の現役諸君を想うと気の毒でならない。歩いてさえいけば前進ができた右肩上がりの時代は去り、もはや坂の上に雲は無い。日に日に枯れゆくオアシスを捨てて、遙かな草原へ密林へと虹を求めて一人一人が旅立つ孤独なグレートジャーニーの時代になった。馬齢を重ねた老兵はひとり静かにコールするのみだ。「やつほー、ひとりっつー」と。

5. わが踏橋会の面々

本間 浩

■蛭川隆夫 リーダー。日立OB。某先輩リーダーによれば、仕事振りが緻密に、抜けが無くなったとのこと。多分キリマンジェロ登山での幹事業務が評価されたのではとみています。今年札幌に移住。まずは一冬越してどうなるか、外野席は固唾を呑んで見ている処。意外にシブトク粘るか。大先輩の山崎さんが亡くなり、石井さんが山歩き出来なくなり、同じ頃に先輩方を乗せ山に向かったワンボックスカーと共に君もいなくなつた。三月会山行のひとつのパターン

が失われた、のであろうか。典型以上のA型。探究心旺盛。

■竹中 彰 サブリーダー。針葉樹会会長。興銀OB。昔、付けた渾名なんかは口にできませんよ。記録上手。目配り広く、小まめな時間チェック。竹中の記録を読んで自分のやったことが判ることがあり貴重品。椿踏会では一番強い、しかも手加減無し。蛭川がいなくなり、この男と一緒に登る機会が増えるわけだが、考えるだけでオー、シンド。A型と思いきやB型。

■村上泰介 社長。頭脳明晰。話が多方面に飛ぶので追うのに苦労する。広島在住。ペースメーカー装着後も県内の山をよく歩き、話があれば大峰山縦走にも参加、丹沢にも脚を伸ばす。その上、酒もよく飲む。その上に、大学院で勉強中。もう好きなようにどうぞ。

■長澤道彦 通称「カッパちゃん」。三菱化学OB。1年の富士山合宿の前、二人で早川尾根から甲斐駒を計画、朝、御座石鉱泉を出、暗くなって早川小屋に到着。翌日合宿参加の長澤と別れ、こっちはのんびり旅。甲斐駒の7合目で泊り翌日下りの5合目でパッタリ会って、話を聞いたら、川にはまつてびしょ濡れになり、岩陰で『一橋論叢』を燃やして暖をとったとのこと。有名な

「カッパの河流れ」の一件です。

■中橋寿雄 画家。キリンOB。昔から山頂でスケッチをしていました。言葉少なく、ベレー帽とくれば、飲んで騒いでいる連中とは、一味違っていました。昔からおとなの風格がありました。今は身体が思わしくなく山登りは出来ないのが残念。

■名和泰三 いろいろあっただろうが、よく我慢して生きてきたものだと思う。社長を除き皆定年を迎え、今日一日をどう過ごすか、いつも考えなきやならない身分になった。君と同じ立場にたったわけだ。ザックを背負わない山登りさ。昔に還ってバテルまで一緒に歩こうや。

■本間 浩 私。積水OB。胃癌手術で減量に成功、日本愛煙&愛飲納税報国会会員。

以上7名がわが踏椿会の面々。健康体の者ばかりではない。今、山に登れている者も登るたびごとに足腰の衰えはヒシヒシと感じられる。寄る年波はそれぞれだが、それでも、かの曹操の思い、「老騎は既に伏すも志は千里にあり」は変わらないだろう。今年の夏は、蛭川が札幌へ行ったのを機に札幌で踏椿会を開くことになった。「夫人同伴可」は初めてだ。名和は勿論、全員で集まって思いも新たに大いに飲みたいものだ。

黒部源流山行

小島 和人(昭40年卒)

2009年の夏、雨に祟られた東北、朝日連峰縦走の帰りの列車の中で話題になった黒部の沢登り、意気揚々と向かったのですが、天は味方せず沢は断念、しかし美しい花々に恵まれ、雷鳥も挨拶に現れました。

メンバー 小島和人、中村雅明(昭43)、川名真理(昭62)

8月12日 新宿(22:30) — (バス※1) — さわやか信州号 東京—立山・室堂アルペンルート

8月13日 有峰口(5:45~5:55) — (タクシー※2) — 折立(7:10~7:45) — 三角点(9:30~30) — 太郎平小屋(11:45~12:10) — 栗

師沢小屋(14:30) [泊]

※2 富山地方鉄道タクシー

8月14日 栗師沢小屋(5:55) — アラスカ庭園(8:30~40) — 祖母岳分岐(9:20) [アルプス庭園・祖母岳(9:30) 往復] — 雲ノ平山荘(10:00~11:00) — 高天原(13:35

〔45〕—高天原山荘(13:50)〔泊〕

○高天原温泉往復(往・15分、復・20分)

8月15日 高天原山荘(5:50) — 水晶池分

岐※(6:40~55) — 岩苔乗越(9:25~40)

— 黒部源流の碑付近(10:40~11:05) — 三

俣山荘(11:50~12:05) — 三俣峠(13:00

~15) — 双六小屋(15:00)〔泊〕

※3 分岐から水晶池往復

8月16日 双六小屋(6:10) — 鏡平分岐

(7:35) — 弓折岳(7:45~50) — 鏡平分岐

(8:00) — 鏡平山荘(8:35~45) — チボ岩

(10:15~45) — ワサヰ平小屋(12:35~

13:15) — 新穂高温泉(14:15~55) — (バ

ス※4) — 平湯(15:38~17:45) — (バス※

4) — 松本(19:10)

※4 濃飛バス

○松本駅 — (タクシー) — 相澤病院 — (タ

クシー) — 東横イン(泊)

8月17日 ○スーパーあざさ4号で帰京

松本(6:51) — 八王子(8:49) — 立川(8:58)

概要

8月12日(木) 11日の出発の予定を、

台風の通過を待って一日延期、12日の夜行バスで新宿京王プラザホテルの裏から出ました。私達の乗った室堂行き高速バスは20名ほどの中年?登山者で程良い混み具合。途中2

時間おき位のトイレ休憩もあり、まあまあのリクライニングで3人共よく寝て富山に向かいました。

8月13日(金) 6時前に予定通り有峰口

にバスは到着。私たちともう一組の登山者がバスから降りただけで大半は室堂に向かいました。川名さん手配のタクシーが待ち構えておりスムーズに乗り換え。しかし有峰林道小見線の入口ゲイトには乗用車の長い列、全て登山者だとの事で、有峰口からの入山の人気の高さに驚きました。心配された台風による崖崩れも無く、小一時間で折立ヒュッテのある登山口に着きました。ここに100人近い登山者が準備中で、我々もおにぎりで朝食を済ませ、遅れを取らぬよう早々に出発しました。

登山者の長い列が出来たり、追い抜いたり追い抜かれたり賑やかな登りでしたが、薄日も射す曇り空、猛暑の今夏としては最高の天候に恵まれ快調な入山日となりました。最初の急登も2ピッチで三角点、後は薬師から黒部五郎にかけての稜線を見ながら緩やかな登りの連続で気分よく折立から約4時間で太郎平小屋に到着。

薬師沢への急な下りにかかると急に登山者が減り、静かな黒部の佇まいが感じられるようになりました。最初の一時間は急な岩の多

い、又はしごなどがある歩きにくい下りで、小島は生まれて初めて足が攣り、暫く休みました。薬師沢の中俣に出ると、流れに沿って心とむ草木に囲まれた山道に変わり、遠く水晶岳など望みながら黒部の空気を楽しんで歩くことが出来ました。花の盛りは過ぎてはいるようでしたが、それでも、ゴゼンタチバナ、エゾシオガマなどが歓迎してくれました。川名さんと中村さんが多くの高山植物を見つけて写真に収めています。HPに掲載されていますのでそちらをご覧ください。

14時過ぎには薬師沢小屋に入り、早速ビールで乾杯し「台風も行って明日からはいい天気になるだろう」など話している内にポツリとききましたが、時々薄日が差し、翌日の好天が期待されました。小屋はかなりの混雑でしたが、3人で2畳に三枚の掛け布団を利用して、翌日の赤木沢に胸膨らませて早めに眠りに入りました。ところが夜半、屋根を打つ雨の音で目覚めました。以来ズーツと雨と仲良く3日間過ごすこととなりました。

8月14日(土) 赤木沢を諦めざるを得ず、しつかりした雨の中を高天原に向かうことになりました。小屋から吊橋を渡り、取っ付きから垂直のはしごが象徴するように、非常に厳しい急登に掛かりました。雲ノ平の行程では最も悪い急坂道で、雨の日など下りでよく怪

我人が出るのと事、吐き気を感じる程の雨中の2時間でした。しかし地獄の後は極楽、急坂が終わるとアラスカ庭園、立ち込める雨霧の下に広がる草原と祖母沢の清らかで豊かな流れは苦勞を流し去ってくれました。そこから脇道に入ってアルプス庭園・祖母岳に遊び、小雨になった中、チングルマ、イワイチョウに囲まれて暫しの時を過ごしました。

そんなゆつたりした雲の中の漫步の後、8月10日に新築なつたばかりの雲ノ平小屋に入り、ラーメンに舌鼓。木の香を楽しめる小屋はトイレなど設備も素晴らしく、「来年はここをベースにして黒部の沢を歩きつくそう」等と夢が大きくなりました。また降りだした中、高天原を目指しました。暗くぐちゃぐちゃの林の中の急な下り、増水して沢のようになつた下り、艱難辛苦のあと高天原について物見台上がる頃には雨も上がりました。ちよつと気になったのは高天原のお花畑が大分水晶岳側からの笹に侵されてきていることです。これも地球温暖化の影かと感じました。

小屋にチェックインしてすぐに今回の山行のメインイベントになつた秘湯に向かいました。テクテクと20分ほど下ると温泉沢の溪流沿いに湯船がありました。緑白色の湯は温かく他の登山者6、7人と一緒でしたが、狭く

感じない掛け流しの湯船で長いこと黒部の森を見て過ごしました。勿論、男女別々の湯船で女性用はスノコで保護されていて、夢にまで見てやって来た川名さんは中村さんと私が去つた後も楽しんでおられました。天候の悪い高天原山荘は比較的空いていて、一人一畳、ゆつたりと休むことが出来ました。

8月15日(日) 天候は変わらず。計画短縮を考え、目標をお花畑に絞り、岩苔小谷から岩苔乗越に出て、鷲羽岳をまいて、黒部源流に下り、三俣山荘に登って双六岳をまき、双六小屋へと向かいました。本来なら稜線から楽しめるはずの北アルプスの山々は雲に包まれ何も見えませんでした。雨は殆ど降らず何時も周りに花々が満ちていました。特に水晶池を過ぎて岩苔小谷に近づいて登る足元にはお花畑が広がり、ミヤマトリカブト、シナノキンバイなどが美しく、岩苔乗越の手前に大きく残る雪溪の近くは、ハクサンイチゲ、ヨツバシオガマのお花畑が広がり、さらにはクルマユリが見事な色合いを見せていました。溪谷に雪溪の多く残る脇を通る、黒部源流の鷲羽の巻き道も花々が何時も励ましてくれました。

霧に包まれながらお花畑だけを楽しみに歩き続けたわけですが、予期せぬ恵みはさらにありました。三俣蓮華のキャンプ場を過ぎて

登りにかかっていたところ、雷鳥を川名さんが見つけ、写真を撮るべく中村さんが近づくと、雷鳥は中村さんに近づき、しばらく中村さんの足元で遊んでいました。高校生の頃、木曾駒に登って雷鳥をよく見かけた記憶が蘇りました。今回の雷鳥は随分太っていました……。

双六小屋の夜、前夜に腕を虫に刺され少し腫れた川名さんが控えるなか、中村さんと私で生ビールのジョッキを傾けました。小屋には公衆電話もあり、山が便利になつているのに感心しました。薬師沢、高天原そしてこの双六小屋、どれも清潔で食事が美味しく、布団もまあまあ、値段は共通の9000円弱ですが山小屋山行も決して悪くないと実感しました。この双六でも美味しい夕食を終えて外に出て見ると星座が現れ、三日月が西の空に出て三俣から樺沢岳への稜線もくつきりと現れていました。早速、予定変更で、「明日は双六に登り黒部五郎から三俣への稜線を楽しんでから帰ろう」ということになり荷物を準備して床に就きました。

8月16日(月) から身で双六岳に登りアルプスの山並みを見渡しながら来年の黒部攻略を話し合うべく4時半に朝食を済ませました。しかし、しかし、好天の予想に反し双六小屋を包む霧は晴れず雨さえ混じり始めまし



高天原山荘のテラスにて。左から 小島、中村、川名。

た。6時に予定をまた変更、新穂高に向けて下りにかかりました。途中期待した槍も滝谷も見えずで、寄り道もして弓折岳近辺のイワカガミ等も楽しみながらゆっくり下りにかかりました。

鏡平から2ピッチほど下った、チボ岩の近く大きな岩が続く道で、魔が差したのか、川名さんが足を滑らせ、岩と岩の間に頭から倒れこみました。急いでザックをもって起こしたところ顔面から出血があり、直ちに水で洗い流し確認したところ目の上を2センチ程

切っておりまし。通りが掛かった登山者の消毒薬も借りて、手持ちのオロナインを使い特別バンドエイドで傷口をふさぎ上から手ぬぐいで縛り30分ほど安静にした所、血も止まったようなので川名さんも自分で荷を担ぎ、手ぬぐい鉢巻でゆっくり下山しました。

わさび平小屋で親切な登山者から消毒薬を借り三角巾を貰って頭部を縛り新穂高に下りました。新穂高の診療所は開いておらず、平湯にも診療所が無く平湯で旅の汗を流し、最終バスで松本に出て、救急指定病院の相澤病院で午後8時に医師の診察を受けました。川名さんによれば、結果的に5針縫い、破傷風の予防注射もしてもらい、9時前に大事に到らず治療は終わりました。3人で松本の東横インに泊まりました。ほんとに軽い怪我で不幸中の幸いでした。

8月17日(火) 早朝、松本駅で蕎麦を食べ6時51分の「あずさ4号」で東京に帰りました。雨に祟られた山行でしたが、多くの花々にめぐり合い、雷鳥と遊び、秘湯・高天原温泉を楽しみ中々充実した4日間でした。

今回の山行で、新聞などで報道されている「若い女性の山歩き」も実感しました。連日、若い女性が一人で、グループで、カップルで結構な荷物を背負って、私などより随分元気に歩き、山小屋でも活発に過ごしていました。

華やいだ雰囲気もまた楽しいものです。でも付け睫毛まで正装の女性にはビックリでした。女性が多かったからでなく、黒部の魅力を再確認して、来年是非再挑戦をと3人で誓って帰京しました。

補足 川名 真理(昭62年卒)

転倒した場所は雨で濡れていたものの、なんとということもないガレ場だったので、左足がすべったら、ヒュンと宙を切って体が下向きになり、ゴツンと頭でとまりました。スローモーションのように転ぶのでなく、ヒュン↓ゴツンと一瞬のできごとでした。倒れた場所が一段低くなっており、不思議なことに体のどこにもふれずに、頭だけでとまったのでした。

左眉の上が切れましたが、意識ははっきりし、痛みもほとんどありません。小島さんが傷を水で洗い、手ぬぐいですぐ止血してくださいました。さらに登山者の方がマキロン消毒後、大きな絆創膏を貼ってくださいました。

30分ほど休憩したのち、ゆっくり自力で下山できました。途中、わさび平小屋で別な登山者の方に再度、マキロン消毒後、新しい絆創膏と三角巾をあてがっていただきました。

新穂高温泉へ平湯へ松本とバスを乗り継ぎ、事故から9時間後に松本の救急病院に到

着。病院では「傷が深いので縫い合わせるのはできるだけ早いほうがよい、すでに時間がたっている」と言われました。深部は溶ける糸で縫い合わせ、表面は5針。東京の病院で抜糸するため、紹介状を書いていただき、念のために破傷風の予防注射も打ってもらいました（3回で「完全免疫」が付き、10年間有効。怪我しやすい人や土いじりをする人はおすすめのこと）。薬は痛み止めと抗生物質の処方を受けました。同行の小島、中村（雅）両先輩には松本一泊までおつきあいいただき、頭が上がりません。すみやかな消毒と止血、縫い合わせが大切だと、身をもって理解しました。荷は軽く、体調もよく、歩きやすい道だったため、調子に乗りすぎていたのかもしれない。痛み止めのお世話になることもなく、一週間後に無事、抜糸。これですんだことは不幸中の幸いです。これからは「高齢者の転倒事故が増えている」という記事を他人事として読めなくなりました。

夏雲をこえて——再会の富士山

坂井 溢弘（昭41年卒）

さあ俺の夏が来たぞと雲の峰

白く輝く空を見上げる

中学2年の頃、家に転がっていた歳時記で「雲の峰」が入道雲であり、積乱雲と同義であることを初めて知った。——良い言葉、だなど少し感動した——

その後、梅雨が終わり、入道雲がムクムクと空に広がると何時も希望に胸を膨らませ空を見上げて上記をつぶやいた。——金が無くても、腹が減っていても、彼女がいなくても——

ただ今年は事前にこの眩きを口にする暇もなく、雲の峰⇨積乱雲と相対したのは、富士の八合目で、息が上がリ、汗を拭いている時だった。

見上げる積乱雲でなく、目の前、少し下方の空間で、しどろに寝そべって寝返りを打ち、自儘に渦を巻いてウネリ、奔放に胎動し上方拡張する生成過程の雲の峰は白い龍にも似

て、美しく見飽きる事が無かった。

ヒヨんなことから始まった夏の富士山——46年ぶりの富士山——のことを書きなさいと我らがリーダー小島さんの強いお達し。芳しい中身では決して無いことをお断りして以下記述します。

7月1日 夕食で山開きのニュースを見ているとき「富士山に行きたい」と突然女房が言い出す。勤務の都合で7月19日〜21日が好ましいと言う。

7月2日 7合目、8合目の山小屋予約願望のTELを繰り返すが全滅。辛うじて8・5合目（3450m）のご来光館がとれた。それにしてもすぎまじい宿取り合戦の現実に驚く。

7月3日 45歳の時、北アルプスの表銀座と槍と穂高に登って以来、20年以上山に行っていないし、急にトレーニングと云っても限界があることより、5合目で前泊することとし、みはらし館を予約。

7月19日 AM勤務を終えた女房の運転する車で箱根湯本を出発。御殿場で日帰り温泉に入り河口湖で夕食し、19:00みはらし館着。

7月20日 6:30 昼食を作ってもらって出発。ピンカラの快晴。9:00、6合目までの途中、泉ヶ滝でスベア用水2リットル、胡瓜他

重量物をカット。6合目までは普通の散歩道。

6〜7合目、登山道に入る。富士山特有の火山灰の砂礫の道、ジクザクのみち、そして上り勾配の道。「30分歩いて5分休む」と歩く前は話していたが、「10分歩いて3分休む」「15分歩いて4分休む」で進むのが精一杯。日頃 *mountain* に励んでいる女房(以下女性軍と云う)は意外に元気、シヤンとしている。小生は(以下男性軍と云う)シヤンとしていない。このギャップは那邊にあり哉? だが現実には現実!

7〜8合目、7合目でようやく体がなれ、溶岩のゴツゴツした鎖交りの道になると男性軍少し面目をもち返してくる。岩場が続くので休むに適した場所が少なく、10分ピッチが15分ピッチに更には20分ピッチにまで伸長し、伸長した分体も慣れてくる。岩場がはじめての女性軍、少し戸惑っている様子。13:00頃漸く8合目着。ゆっくり雲をながめ、雲を見下ろし昼食。

8〜本8合目、8合目の次に何故本8合目があるのだろうか? ブツクサ思い乍ら、小屋の間の階段道を黙々と登る。女性軍意気軒昂、男性軍少し息上がり気味。本8合目 14:10着。本8合目〜8・5合目、本8合目で再び大休止、かなり疲労度の高い足を引きずって8・5合目のご来光館についたのは15:30分

を少し過ぎていました。かなりヨレヨレに、

まーバテイマシタ! 「でもまあよく来たよ。途中経過に目をつぶればそれなりに立派なものだよ」と、はるか下の6合目の小屋を見下ろして自画自賛。ヒョンな事から来て見たが、富士のお山は「マツコト高くて、シンドカッタよ」。コースタイム? あれはあまり参考にならないよ。全くー(今の実力では…)。

24:00、ご来光館で宿泊中、宿泊所から少し離れたところに立つトイレに行こうと小屋を出た途端、夜の軍団がザックザックと小屋の前を通り過ぎていく。人、人、人の列が続く。小屋の前はラッシュアワー。見下ろすと6合目から続く登山道に——そしてその下にも——ライトが点々と動き、その列が登山道を埋め尽くして続々とつづく。——21日頂上でご来光を迎える人たちの長蛇の列——夜気の底に人の営みの強さ(業)が宿っているように見えた。日本人ってマダマダ若くてタクマシイな! と思ったのは、上から見下ろしている束の間の余裕?

7月21日 4:55起床。ご来光は4:35頃という。昨夜のヘッドライトの列は今はない。払暁の空が今日はいい事があるよとささやいている。雲が多いが、やさしさに溢れた今日を生む敵かで美しい薄紅の東雲の空、雲間に日が昇る。思わず合掌する。——山中湖はま

だ眠っている——きっと今日は素晴らしい日になる——そう、頂上はあとわずか90分だもんな! ルンルン!

6:30 ご来光館出発。女性軍 7:50 頂上着、男性軍 8:05 頃頂上着。

8:30 お鉢巡りも少し雪が残っていてシンドいので割愛して下りにかかる。大昔は走り降りた道も、今日はツマ先の痛いこと。シンドイ事そしていつ迄も続きおる事。ともかく、単調を2乗、3乗したい様なブルドーザー道の下り。でも7合目位から火山灰だの斜面に虎杖(くまざき)が点々と群生しその爽やかなウス緑を山霧が撫でていくのは流石、富士山。一幅の名画。

12:00 延々と続きそして途中水がなくなつた為「水水水」と思い乍ら下った道も6合目で漸く終了し5合目着。真先に水を求めグビグビ飲む。5合目にとめた車で登山靴を脱いでサンダルに履き替えると今回の山行は終了。昼食に飲んだビールは、又、格別ではありませんでした。

終わりに

① 46年ぶりに登った富士山——下りの途中、7合目からふり仰いだ富士山は「よくぞまー」と思える程、高い富士山でした。

② スバルラインを車で駆け抜け乍ら、落葉松

の切れ間に見上げた富士山は高くオゴソカに聳え乍らも「よく来たね」と語りかけてくれる親しくやさしい富士山でした。

③胸をはって〇〇時間で富士山に登ったよ！とは云えないけれど、あの高い積乱雲を少しの時間だけ越えた——そして今まで知らなかった雲の峰のノタ打つ生成過程を垣間見た——女性軍との小やかな山旅でした。

④旧盆に孫を連れて娘が帰ってきます。女性軍からお祖母ちゃんに還った女房は孫にこう語るかもしれません。「あの白い入道雲は大きくて高いねー。でもお祖母ちゃんはあの雲より高い富士山に登ったんだよ」。孫も相槌を打つでしょう。「フーン。お祖母ちゃんエライんだ」。孫は幼稚園中年ですからまだ素直です。

⑤心の勲章という言葉があります。記録では決してとらえることの出来ない「小やかな心の勲章」が今も生きていることを女性軍共々感じている此の頃です。

ありがとう富士山
いつの日か更にキタエテ、又。。。と唱え乍ら、稿を終えます。

大雪連峰縦走（黒岳くトムラウシ山）

中村 雅明（昭43年卒）

北の山、大雪、トムラウシ、何てロマンを感じる言葉だろう。遙かなるトムラウシを指して、花また花の大雪連峰を縦走するのは長年の夢（憧れ）でした。昨年の4月にもう一つの夢であった屋久島・宮之浦岳の登頂を果たし、帰りがけにいよいよ大雪連峰の縦走をしようと思子・航と話が纏まりました。7月中旬の予定で準備を始めましたが、息子の仕事の調整がつかず、1年延期することになりました。ところが、昨年7月16日にトムラウシ山で8名が死亡する山岳史上に残る大遭難が発生しました。今回の山行は、その遭難に関する新聞・雑誌記事を精読し、そこから得た教訓を生かすべく諸準備（行動・装備計画等）を1年がかりで進めました。

（その1）長丁場（8時間半）・難コースのトムラウシ山を越える日は予備日を設定し、悪天日の行動を避ける。

（その2）ヒサゴ沼避難小屋までの行程もゆつ

たりとしたものとする。その為に、通常1日コースである白雲避難小屋からヒサゴ沼避難小屋までを2日行程とし、忠別岳避難小屋で泊まる。これによつて雨天に行動してもあまり濡れることなく宿泊小屋に着けることは勿論、混むことが心配される各避難小屋に早く到着し、寝場所を確保できること、途中で遭遇するお花畑で心ゆくまで花を眺める余裕が生まれます。

（その3）強雨・低温対策として、高機能雨具、吸汗速乾素材のアンダーウェア、インナーザック、インナーダウン、カイロを用意する。

（その4）的確に気象判断するために、山ラジオ（SONY製、携帯電話の予備電池パックを持参する。

（その5）非常事態に備えて2人用ツェルトを持参する。

今回の山行の相棒は、長男（38歳）です。山登りに関しては学生時代には無縁でしたが2006年に日本アウトドア・バンド協会長野校の「冒険教育指導者育成コース（68泊69日）」を受講し、山登りの本格的な訓練を受けています。体力面の心配もなく、心強い相棒と言えます。さらに良いのは「超晴れ男」で、一緒に旅行すると悪天予報でも必ず好天

に恵まれます。その強運を信じて、梅雨明け前の不順な天気が続く東京を後にしました。

●7月8日(木) 曇り後小雨(一時晴れ間)

旭川行JAL第2便(7:25)で羽田を出発、5:10に旭川着。1階到着ロビー総合案内でガスカートリッジ3個を購入し、直ちにリムジンバスで旭川駅に向かいました。

旭川駅で層雲峡行のバスに乗り継ぎ(45分待)、12:35に層雲峡に到着しましたが、途中で降り始めた大粒の雨が止みません。バス待合所で昼食を済ませ、雨具、スパッツ、ザックカバールの完全武装でロープウェイ駅に向かいました。ところがロープウェイ駅に着いてびっくり。雷の為、一時運休中でした。このまま動かなかつたらいきなりの計画変更で麓で一泊し、早くも予備日を使ってしまうと危惧しました。幸い14:00に運行が再開されホッとしました。リフトを乗り継ぎ黒岳7合目に着いた時(14:30)は殆ど雨が上りました。ここでシマリスの迎えを受けにつこり。荷物を整理して黒岳に向かって歩き始めました。丸5日分の食糧の重さがこたえます。すぐに晴れ間が広がりました。時折、黒岳から下山してくる登山者に会いました。八合目、九合目と登るにつれて登山道の両脇にウコンウツギ、チシマノキンバイソウ、カラマツソウ、オオカサモチ、トカチフウロ、ハクサン

チドリチドリの群落が次々に現れます。早くも大雪の高山植物に出会えて歓声を上げ写真を撮りまくりました。黒岳山頂に到着する頃(5:55)はガスが広がり残念ながら眺望がありません。冷たい風も吹いてきたのでエゾツツジ、イワブクロの写真を撮つてすぐに石室に向かいました。石室の近くもエゾコザクラ、チングルマの群落が見事です。石室に16:30に到着しました。受付で「雨の中を良く来ましたね」と労いの言葉を受け、黒岳周辺はかなり激しい雷雨に見舞われたことを知りました。

1人当たり1枚のゴザと毛布を借りて、二段になつている寢床の上段に二人分の場所を確保しました。石室はそれほど混雑していませんでした。外はまだ薄明るいのですが、窓がない小屋の中は暗く、ヘッドランプの灯りを頼りに夕食の準備にかかりました。水は入り口近くに設置してあるポリタンクの雪渓を溶かした水を使用します。炊事は入り口の近くの炊事棚でやる決まりですが、遅れて小屋に着いたため、スペースがなく、片隅の土間でやるのが不便でした。本日の献立はバックご飯とレトルトカレーが主食で、にゅうめんが副食、キュウリ、レタス、トマトの野菜もついでかなり御馳走です。山に来てまで野菜が食べられると息子が喜びました。尤も、野菜は明日までです。石室は窓が無く薄暗く快適

とは言えませんが、程無く電灯がつき居住性が良くなりました。食事を終え、別棟のトイレに行くとし雨が降っています。トイレは今まで見たことがない立派なもので、使用後は自転車漕ぎをしてオガクズを混ぜるバイオトイレです。宿泊代の2000円はこの設備負担のためかと納得しました。2階のためか石室の割に寒くなく、毛布はエアマットの代わりに下に敷き、18:30に就寝。天気予報では明日は好天が見込まれるのでそれに期待して寝つきました。

●7月9日(金) 晴れ後曇り

▲黒岳石室を出発。ガスつていますが、直ぐに晴れてくる気配に心弾みます。石室から這松帯を下つて間もなくチングルマ、エゾツガザクラの群落が見事な自然庭園を通過しました。その先の大きな雪渓を登りにかかる頃から次第に青空が広がってきました。雪が朝日に輝き青空とのコントラストが何とも言えない美しさです。写真を撮りながらゆつくり登りました。雪渓の一部が切れて赤石川が滔々と流れている脇を通過しました。「山の上にこんな流れがある！」と感嘆しました。大雪山のアイヌ名(ヌタクカムウシユベ川がめぐる上にそびえる山)を実感する景色でした。北海沢に沿った尾根を登り始めるとチングルマ、エゾノツガザクラ、イワブクロの

群落が次々に現れました。特におおきな塊になつて咲いているイワブクロの見事な群落に目を見張りました。ザラザラした斜面を登つて6:40 北海岳着。旭岳はまだガスの中ですが、間宮岳から歩いてくる5〜6人のパーティが見えました。

御鉢平越しに北鎮岳、凌雲岳、桂月岳の連なりが望めます。頂上付近で大雪山だけに見られるキバナシオガマを見つけました。北海岳から白雲分岐へ向かう途中の草原で小憩。ここも高山植物が咲き乱れる本当に気持ち良い所でした。チングルマ、エゾノハクサンイチゲ、エゾノツガザクラ、ハクサンチドリが一面に咲き競つて彩り鮮やかです。白雲分岐で大休止。この頃にはガスがすっかり晴れ、眺望この上なし。

ここにザックを置いて白雲岳を往復することを考えましたが、熊に食糧を狙われるのを心配して重いザックを背負つたままで白雲岳に向かいました。頂上近くの白雲平と呼ばれている火口原脇のチングルマ、エゾノツガザクラの群落が見事でした。頂上直下は大きな岩が積み重なり重荷では息を切らしました。8:00 白雲岳山頂着。白雲岳からの眺望は360度の大パノラマです。旭岳から北鎮岳、黒岳、さらにこれから縦走で歩いていく高根ヶ原、忠別岳までが遠望されます。残念ながら

トムラウシ山はガスの中です。旭岳から北海岳にかけての残雪模様は見飽きることがありません。高根ヶ原の緑の雄大な広がりにも圧倒されました。風も心地よく35分山頂で存分に景色を楽しみました。

帰りがけに白雲平の向かい側に林立する岩石群に立ち寄りました。そこに行く途中でハコヨモギ、コマクサの群落を写真に撮りました。この岩越しに白雲避難小屋が見えました。白雲分岐に戻り、20分下つて10:25 白雲避難小屋に到着。収容人員60名の木造2階建ての立派な小屋です。小屋番は外で仕事なので、勝手に上がり込み2階の窓際に陣取りました。

荷物整理、昼食を済ませ、小屋の下の雪渓を渡つて板垣新道經由で小泉岳と緑岳の稜線の分岐へ上りました。この登りでピンクのエゾツツジの群落を楽しみました。小屋に縦走の荷物の入ったザックを置いて出たので足取り軽快です。12:10 緑岳山頂着。大雪高原温泉から登ってきた女性二人が休んでいました。残念ながらガスが湧きだし眺望は得られません。

先ほどの分岐まで戻り、今度は小泉岳に向かってゆるやかな斜面の中を登つていきます。この斜面のお花畑は高山植物の宝庫でした。ホソバツメクサ、チシマキンレイカ、エ

ゾツツジ、コマクサ、マルバシモツケ、シロバナミヤマアズマギク、ホソバウルツブソウ、メアカンキンバイが次々に現れ、その種類の多さと彩りの美しさに驚き感激しました。メインの縦走路から外れているので小泉岳に寄らない人が多いと思いますが、ここを薦めてくれた小野先輩に感謝しました。小泉岳はピークというより、広い台地でどこが頂上かケルンがないと判りません。広々とした中山頂を示す道標がポツンと立っているのはとても幻想的な光景でした。息子は「こんな山があるのだ」と感心しきりです。

小泉岳から白雲分岐に出て、先ほど歩いた道を下つて14:00に白雲避難小屋に戻りました。夕方になるにつれて少しずつ宿泊者が増えて、2階に7人、1階にツアーパーティ10人と小さな小屋が賑やかになりました。それでもまだ余裕ありました。夕方から小雨。明日は好天が望めそうにない模様です。17:00 夕食。19:00 就寝。

● 7月10日(土) 曇り時々小雨

今日は忠別沼避難小屋までの楽な行程です。3時起床。5:35 白雲避難小屋発。小雨が降りやまずガスで眺望はありません。小屋から直ぐの大きな雪渓脇を下つた後、少し登つて高根ヶ原に出ました。高根ヶ原は標高1700m台の溶岩台地で殆ど登り下りのな

平坦な道が続きます。高根ヶ原は花の名所です。火山性の平たい石の散らばる地面のあちこちに高山植物の見事な群落が見られます。場所によっては、エゾツツジ、チシマキンレイカ、ホソバウルップソウが寄せ植えのように入り混じって咲き競い、ピンク、黄、薄紫の色の取り合わせが美しく目を楽しませてくれます。また、エゾハハコヨモギだけが一面に咲いている所もあります。

高根ヶ原分岐を過ぎると道の両側の地面一杯にコマクサの群落が現れ、一輪ずつの可憐な姿とその群落のスケールに圧倒されました。写真を撮りながらの贅沢な道草道中です。後から出発した3人パーティ、10人パーティに追い越されますが今日は忠別岳を越えるだけの行程なので気になりません。しばらくすると稜線の左側が切り立った崖になり、雪溪の下に高原沼などいくつかの沼が見えてきました。沼の周りの道は熊が出没するので通行禁止となっています。

平ヶ岳のピークを左に捲いて、幾つものお花畑を通過して行きます。エゾツツジのお花畑でシマリスを見つけました。リフト終点で見て以来2度目の対面です。やがて緩やかな下りになり、8:30忠別沼に出来ました。沼の周辺に一面キバナシヤクナゲが咲いていました。ガスが晴れるのを待って写真を撮り、忠

別岳の登りにかかりました。この登りでもイワブクロの群落を見ました。思ったほど苦労せずに8:50忠別岳に着きました。山頂の片側は大きく削られて切り立った崖になっています。先行の10人ツアーパーティが休んでいます。運よくトムラウシ方面のガスが晴れ、遠く高く聳えているトムラウシ山を見ることが出来ました。ほんの一瞬だけですぐ姿を隠しました。好運な初見参に感謝しました。雨が少し強くなってきたので下りにかかりました。

下り始めの登山道の両脇の広い斜面は、チングルマの花が満開のお花畑です。それを過ぎると道松帯に入りましたが、背丈を越す道松は枝払いをしていないので雨具がびしょびしょになりました。それかなり長い下りです。「逆コースを縦走してここを登るのはイヤだね」と意見一致。50分下って10:50忠別岳避難小屋分岐に着きました。先行2パーティが休んでいる所を通り抜け、避難小屋に向かいました。分岐から下ること20分。雪溪を斜めにトラバースした先に三角屋根で二階建ての忠別岳避難小屋がありました(11:10)。まだ早い時刻なので誰もいません。1階は暗く湿っぽいので今日も2階に陣取りました。なかなか快適です。今日の同宿者が少ないことを予想して、シュラフ、マット等寝るのに

必要なもののみ2階に上げました。

昼食の後、夕飯の準備まではたっぷり時間があるので、シュラフに寝転んで記録整理などでのんびり過ごしました。3時過ぎに単独行者が二人到着しました。

二人とも沼ノ原から登って来たそうです。二人とも大雪に足繁く通っているとのこと、トムラウシまでのコースについていろいろ教えてもらいました。特に東京から来た人は毎年大雪に通い今年が13回目、「大雪に來たら他の山に登る気がしない」との言葉にうなずきました。この日も夕食を早く済まし、18:00就寝。

●7月11日(日) 霧雨

8:50起床。9:30忠別岳避難小屋を出発。雨が上がっていますが、ガスがかかり眺望がききません。五色岳までは道松帯なので、朝露に濡れる恐れから今日も完全雨具支度です。

雪溪を登り、道松とササの茂る林を抜けて稜線に戻りました。五色岳の登りの道松帯は、枝払いが良くあまり濡れずに済みました。ゆるやかに登って9:50五色岳山頂。五色岳から1P目の休憩で携帯電話の電波をキャッチしました。Yahooの天気予報で上川町の天気は12日は気圧の谷が通過するので雨(午前中は強風雨)、13日は好天と知り、明日は停滞、13日に下山の方針を固めました。化雲平手前の



念願のトムラウシ山頂上で息子(右)と握手。

大きな雪渓をトラバースし、化雲平の木道を進むとホソバウルツプソウの群落が見事です。それに目を奪われながら歩を進めるとガスの中に池塘群が現われました。池塘の中に点在する石の配置の妙と池塘の周りに咲き競うチングルマの美しさに息を飲みました。それも一つだけでなく、大小四つ五つ配置されています。ガスが晴れるのをじつくり待って写真を撮りました。化雲岳に登る登山道の両

脇にも素晴らしいお花畑が広がっていました。見渡す限りの斜面一面がチングルマの白い花で埋められています。∞化雲岳山頂。まさに山頂に「化雲岩」という大きな岩塔があり、上に登る踏み跡がありました。少し危険と考えて登るのを控えました。帰宅してから深田久弥の「日本百名山」を読み直したら、「その狭い頂さへ攀じ登っておしゃべりの一刻を過ごした。」とあり、登るべきだったと思いました。この頃から化雲岳近くのガスが切れ始め、上空に青空が広がってきました。トムラウシ方面のガスが晴れるのを暫く待ちましたが、晴れそうにないのであきらめてヒサゴ沼に向かいました。化雲岳から下り始めてすぐに「神遊びの庭」カムイミンタラに着きました。ここもチングルマの群落が見渡す限りに広がっています。まさに天上の花園の様な景色に心を奪われます。ヒサゴ沼分岐に降りて行く途中でサーアとガスが晴れて眼前にトムラウシ山に続く稜線が見えてきました。日本庭園、ロックガーデン、北沼に登る登山道が良くみえます。いよいよトムラウシに近づいてきた実感が湧きました。残念ながらトムラウシ山の頂上近くはガスが晴れません。でもその為にトムラウシ山の両方の山腹がそのまま上がり頂上が高くなると錯覚し荘厳な気持

ちになりました。息子は「この山行は『ロード・オブ・ザ・リング』のようで、目的地である北海道第2の高さのトムラウシ山にリングを納めに行くようだ」と感想を漏らします。私もそれにうなずき、腰をおろして飽かず眺めました。頂上のガスが晴れるのを待ちましたが、晴れそうにないのでヒサゴ沼に向かいました。ヒサゴ沼分岐から10分ほど岩礫地帯を歩くと、沢に広がる大きな雪渓の向こうにヒサゴ沼が見えてきました。北欧かカナダか……と日本離れた光景に唸りました。沼に下る雪渓の上は夏の暑い陽差しが照り返し半袖でも暑いくらいです。勿論、軽アイゼンを使う必要はありません。TCSヒサゴ沼避難小屋着。小屋には誰もいません。滞在者は出払っている様です。2階の冬の出入口の近くに陣取りました。木製のドアを開けるとヒサゴ沼が良く見える絶好の場所です。ドアの近くに濡れ物を広げ乾かしました。昼食の後、小屋近くの沼に雪解け水が流れ込む水場に行きました。ここ数日間、ティッシュで拭き取るだけだった食器を洗い、身体もタオルで拭いてさっぱりしました。小屋に早く着いてこの様にのんびり過ごすのは良いものです。3時過ぎから宿泊者が増えてきました。4時過ぎには10人ツアーパーティが到着し、1階に陣取りました。2階の同宿者は8名でゆった

りです。夕方からガスリ、夜半から雨になりました。明日は恐らく停滞です。18:00就寝。

● 7月12日(月) 雨後夜半より晴れ

⚡起床。朝から低気圧の接近のため風雨が強く、昨日決めた通り休養日とすることにしました。他パーティも殆ど停滞ですが、天人峡へ下る5人パーティのみ強い雨の中を出発しました。ゆっくり朝食を済ますと暫しまどろみます。余り寝てしまうと夜眠れなくなるので、昨年の遭難に関する資料を精読しました。それが済むと、恰好な暇潰しを見つけました。重いのを覚悟で持参した『北海道の高山植物』と首つ引きで昨日まで撮った花の名前を調べました。図鑑で花が見つかるのと紙の小片を挟みます。小片はかなりの数になりました。あと一つの暇潰しは、食糧の整理と来年の縦走食糧計画です。山行前に作成して持参した献立表を実際食べたもので修正し、評価を○△×で付けました。今回の食糧は軽量化・コンパクト化があまり考慮されていません。副食扱いで持参したにゅうめん、みそ煮込みうどんなど「缶食」が◎で、家庭用のごはんパックは×です。重くかさばるのとお湯で温めるのに時間がかかるのが難点です。次回からフリーズドライ食品主体にして軽量&コンパクト化を図ることで改善案が一致しました。夕方5時近くに大阪の5人パー

ティが、6時過ぎに道内の消防士3人パーティが到着し、小屋はほぼ満員になりました。新しいメンバーの様子を眺めていると気が紛れます。夕方には雨が上がり、うつつらと日が差し、明日の好天が見込まれ嬉しくなりました。18:00就寝。

● 7月13日(火) 快晴

今日はいよいよトムラウシ山を越える日です。前日は停滞日で動いていないのと、気持ちの高ぶりで1時半頃に目覚めてその後寝付かれません。2:30起床。皆が寝静まっているので物音を立てない様に食事の準備をしました。すぐに湯を沸かしてパックのご飯を温め、さらにそのお湯でみそ汁とカルピ井の素を湯戻しして朝食の出来上がり。3時過ぎには食べ終えて、パッキングしました。その頃には小屋の内部も明るくなり他のパーティも起き始めました。4:20に他のパーティに先駆けて出発。一点の雲のない快晴。風は強いですが、これ以上ない天気には心弾みます。荷物もぐーんと軽くなりました。これぞ縦走の楽しみみです。ヒサゴのコルに登る雪渓は早朝故、凍っていて危険なので軽アイゼンを付けて登りました。コルからの急登をしのぐと道はなだらかになり景色を眺めながら気持ち良く歩きました。ほどなく日本庭園に着きました。石を絶妙に配置した池塘の周りにチングルマが咲

き競い、正に神様が作った庭園の趣です。何度も立ち留まり写真を撮りました。その先は巨岩がゴロゴロするロックガーデンです。岩の上に足をバランス良く置き慎重に進みません。岩稜歩きの初心者にはつらい箇所です。昨年の遭難パーティはここで転倒する人がいました。強風雨の悪天では確かに難儀する箇所だねと息子と意見一致。

ロックガーデンを越えると北沼への急登が待っていました。息を切らしてそれを登ると北沼が眼下に広がります。北沼は想像した以上に大きな沼、と言うより山上の湖で雪渓が周りにあつて青い空とのコントラストがなんとも言えず美しく、心地よい風に吹かれて休まりました。昨年の遭難の時はこの沼の水が溢れ出し、30cm以上の渡渉を強いられ、ここで4人も死亡しました。今日は水面も静かでそんな悲劇が起った沼とは思えません。いよいよ最後の難関トムラウシ山の登りにかかりました。頂上近くになると傾斜が急になり岩の間を息を切らして登りますが、岩陰に咲くエゾノツガザクラの見事な群落に慰められます。北沼から登ること25分でトムラウシ山(2141m)の頂上に着きました(17:35)。念願の頂上に感激ひとしおです。息子と二人でガッチリ握手。息子も嬉しそうです。頂上には短縮ルートから登って来た一番乗りの単

独行者がいるだけで、静かな頂上からの景観を存分に楽しみ、写真を撮りました。360度の大展望。遠くの山もクッキリ見えます。十勝連峰、ひとときわ十勝岳の秀麗な姿が目を見えます。トムラウシ山からオプタテシケ山に続く緑溢れるゆるやかな稜線も歩いてみたい気を起こします。北に目を転ずると自分達の足跡を残してきた黒岳、白雲岳、忠別岳、五色岳、化雲岳が延々と連なります。五色岳から沼ノ原に降りる長大なだらかな尾根にも心惹かれました。西方には石狩岳、ニペソツ山も望めます。

20分ほど展望を楽しみトムラウシ温泉への下りかかりました。途中、短縮コースからトムラウシ山を目指す登山者に多数出合いました。殆どが日帰り往復者ですが、中に大きなザックを背負った縦走者もいます。トムラウシ山を越えて縦走する人に敬服しました。岩がゴロゴロする急な下りを過ぎると南沼に着きました。ここは草原の中を雪溪から流れ出る清冽な水が流れ、高山植物が咲き乱れる山上の楽園です。水際の石に腰をかけ、昼食を摂るのは気持ち良いものでした。さらに下り、岩と水と雪溪そして林立する奇岩のトムラウシ公園でも高山植物を楽しみ、前トム平で小憩しました。ここで見事なチシマギキョウの群落を見つけ感激しました。コマド

リ沢の長い雪溪を下り終え、尾根へ登る頃から暑くなりました。カムイ天まで長いササの切り払いの尾根道は雨上がりの為かドロインコで苦しめられました。温泉コース分岐からは道も良くなり、疲れにめげずひたすら歩いて14:30にトムラウシ登山口へ下山。5泊6日の縦走を無事終了しました。東大雪荘はすぐ近くで、大きな露天風呂が二つある良い温泉でした。部屋は個室が満室の為、登山者用の大広間の男女相部屋（1泊2食7500円）です。各自の布団に陣取りました。それでも避難小屋に5泊してきたので天国です。同宿者は殆どが翌朝3時にトムラウシ山に出発する人で、こちらが翌朝目を覚ました時は、布団が殆どたまたまれていました。昨年の遭難の後、縦走ツアーは減り、日帰りが増えたそうです。夕食前後に温泉にゆっくり浸かり、身体の疲れを癒し充実した山行の余韻を楽しみました。

●7月14日（水）曇り時々晴れ

朝は5時半に起きてまず温泉へ。下山した翌朝の温泉は格別です。溪流沿いの露天風呂は山の緑が美しく、流の音とひんやりした空気に包まれて最高の気分です。7時に朝食。

事前に予約しておいたタクシーに8時前に乗り込み、東大雪荘を出発。1時間ほどで新得駅に到着。路線バスの運行開始（7/17）

前で14000円の出費は痛かったですが、運転手さんとの会話を楽しめました。新得から根室本線で帯広に移動し、駅近くで買物・食事を楽しんだ後、帯広空港に向かい、15:30発のJAL便で夕刻帰京しました。

※今回、長年念願の大雪山連峰の縦走を天気に恵まれ果たすことが出来ました。想像した以上に雄大優美な山岳景観と素晴らしい高山植物の群落を満喫しました。今までに重ねた山行の中でベストワンです。

※今回の山行に当たって、小野さん、蛭川さんに有益なアドバイスをいただきました。竹中さんが書かれた北海道紀行（1）の黒岳く忠別岳の記述も参考にさせていただきました。感謝いたします。

三月会通信

■平成22年5月17日■

【出席者】佐藤、中川、三井、遠藤、高橋、竹中、小島、三森、中村(雅)、蛭川(記録)

▽総務幹事のメール・メッセージ

高崎(俊)さんは法事で欠席。「気にかかる事柄」として、①総会出欠のハガキ集まり悪い、②6/1の幹事会、6/8の評議員会出席よろしくお願いしたい、③会費規則の改定が必要、④90周年事業どうするかなど。

▽三月会は休止となるか？

これも高崎さんの「気にかかる事柄」。7/9月は、14Fが改装で使えないのです。継続すべし、それもなるべく如水会館で継続すべしで意見が一致。1Fのバブ・テラス「マキキュリー」がいだらうとのこと、お開き後、下見をしました。▽「山の日」(祝日)を制定しよう！

▽環境にかかわるイベント紹介

・シンポジウム 「世界自然遺産」を考える——保護と利用のあり方

6/13(日)9:30~16:00 上智大学

・「エコロジカルアート」展——しぜん・はっけん・

かんどう・たのしみながらの

2010/6/12~2011/5/31 南アルプス芦安山岳館 (詳細は蛭川へ)

▽佐藤之敏さんの長編小説

前月の三月会記録でふれた小説ですが、之さんにメールで聞いたら、なんと「パソコンで、びつり450頁」「日本での出版となりまずとほぼ800頁。すごい！」「書き始める時、ドイツ語で書くか英語で書くか随分考えましたが、先ず日本で出版したいと思ひ、取り敢えず日本語で書いたそうです。小説のタイトルは、『最後の登攀……永遠からの手紙』(英文タイトル「The last ascent—letters from eternity」)。

「もし時間と幾ばくかでも関心(好奇心?)が或る方には、読んで頂きたいと思っております」とのこと。そういう向きは、原稿を持っている村上さん(tm@urban.ne.jp)へ「」請求ください。

ちなみに、村上さんは、450頁を印刷して読破し、ただ今、ドイツを旅行中、之さんとも会うそうです。帰国後、之さんの最近の様子でも投稿してもらいたいものです。

■平成22年6月21日■

【出席者】佐藤、三井、蛭川、竹中、小島、中村(雅)、高崎(俊)、記録)

総会を翌日に控え、出席者は、常連の皆さんを含

め、少なめだった。

▽徳本峠越え談義：今は島々からの登りはポピュラーではなくなつた。その昔は谷道ではなく、尾根筋の道があつたはずだ。(徳沢園の牧場に牛をどうやって運び上げたか、の話から)牛は「橋」を通れないが「山道」は通る。律令時代の東山道とかは山道であつた。

▽久しぶりに本間さんが登場、「ハイキング・クラブの下見で湯坂路を歩いて来た」。懇親山行は華厳山(丹沢の東側、宮が瀬湖の南東、標高602m)を考えている。ヒルが多い季節を避けると、時期は10月頃になるか。特に最近丹沢の東部、北部にヒルが増えた。里にも下りて来ている様子だ。西丹沢にはいない。退治するには「塩」がよく効く。昨日(6月21日)は、一橋山岳部の誕生日だ。当時は「山岳会」と名乗っていた。90周年記念事業については、明日の総会で議論される。

▽三井さんが、45年前に、日本の鉄道の全線乗車を達成した(10年位かかった)話から、中央線の岡谷・塩尻間のルートが変わっている、「小野」にはどうやって行くのだ？(中央東線の各駅停車で行ける)、オーション会の「甲州街道踏破」は終了した、に関連して、「塩尻峠」は日本分水嶺の線上にあるのか？(日本山岳会の100周年記念行事として、中央分水嶺踏査事業が進められた結果、2006年6月17日、全ルートの踏査が完了した。報告書はWebで閲覧が可能で

す)

▽竹中さんが昨夏の「トムラウシ遭難」の報告書を受け取られ持参された。内容はWEBでも見るこ
とが出来ます。

○前期・後期を問わず高齢者になると、「実は学生時代に」から始まる色々な話が出て来ます。今回は昭和30年代の後半、横尾尾根に春合宿を展開した時の話になりました。チーフ・リーダーの認知していなかったものを含めて4件の重大ではないアクシデントが起きていたそうです。

入山する際、釜トンネル手前、坂巻温泉の近くのトンネルの中で転倒して膝を痛めて、ベースまでは行けたものの、そのまま下山した、横尾尾根の稜線に出て後、転倒してアイゼンで脚に穴を開けた、奥穂高に向かうアタック隊をサポートして下降中に滑落して、事無きを得たが、目撃したアタック隊は帰幕するまで心配だった、下山途中に釜トンネルの入り口直前で荷物のスキーを雪面に引っ掛けて梓川斜面を一回転した、等。針葉樹には記録として残っていません。生きているから言えることではありません。

■平成22年7月20日■

【出席者】 中川、高橋、本間、小島、中村(雅)、高崎(俊)、記録)

梅雨明け直後の真夏日となり、常連の皆さんのう

ち、三井さんは南アルプスへ、竹中さんは日本山岳会の行事と重なり、蛭川さんは北海道移住、と出席者は少なめだった。

▽次回の懇親山行の鳥甲山には皆さん興味を示された。紅葉には少し時期が早い、秋山郷の景観、頂上直下の岩場など、楽しみ山行になりそう。

▽紅葉はやはり10月中旬の上高地が良い、という話から、高橋さんは、紅葉一般ではなく、個々の樹木の其々の紅葉を楽しみたい、特に岳沢の入り口から明神池にかけての「コバコハウチワカエデ」、帝国ホテル周辺の「ハルニレ」の紅葉を是非見てみたい。(昔のイメージが未だ残る嘉門次小屋の蕎麦は美味いぞ！)

▽本間さんが学生の米田さんと大岳山に登った。ツヅラ岩の景観は変わったし、昔は見られなかった滝が見える道になっている。学生さんは運動靴で、登山靴を買えば行く気になるのではないだろうか。(東京では山靴屋が少なくなった)

▽最近の山では、(厚顔の)中高年登山者に混じって所謂「山ガール」が増えて来た。彼女等は「山道具屋に言われるままに、服装・装備は金にあかして」人種ほど派手ではないし、マナーも良いし、捨てたものではない。

▽中川さんから、10月に計画している北岳バットレス行(10月7〜9日)に備えて9月には奥秩父の小川山で、藤原さんと一緒にトレーニングをやる。丹沢に通っている本間さんから、尊佛小屋情報では、大樺沢の上部、八本歯に出る辺りの

落石が酷く、小太郎尾根經由の方が安全だという話があった。

九十周年記念事業はやはり山登りが一番。中村(保)さんの「チベットの東」の未踏峰に登ろう。登攀隊、サポート隊、追遠隊等、各自の好みに合わせて個人山行を集合的に行うような形が考えられないか。早めにプロジェクトチームを組織して取りかろう。

○また、針葉樹15号も出したい。中村(雅)さんが部室の書籍・記録を整理した際、2000年までは部としての記録がかなり整理されて残されていることが分った。この機会を逃すと、途絶えてしまう恐れがある。

○竹中さんがメールで提起された「現役学生(山友会)：部長は山岳部の望月さんが兼任が大勢で北岳に登る計画を耳にしたが、針葉樹会として指導・援助の必要は無いのか、万が一の時はどうする？」の問題に関して、「山友会の行事であれば、部長は同一人だとしても、干渉する事は無からう」が大勢の見解だった。

■平成22年8月16日■

【出席者】 高崎(治郎)、中川、三井、高橋、竹中、本間、岡田、高崎(俊)、記録)

連日の猛暑・真夏日、中高年者の熱中症が毎日の

ようにニュースになる暑いなか、都心に出るのは命がけかも知れません。今回は久しぶりに高崎(治郎)さんが参加されました。入学直後に山田欽一教授(数学)から「南竹君！」と声を掛けられて大変感激したと言う話から始まって、オフレコの話を含めて、盛り上がりました。

▽小島さん、中村(雅)さん、川名さんの元氣3人組(昨夏は朝日連峰も縦走)は予定通り黒部川源流で涼しさを満喫している事でしょうか。山行の記録・印象を3人がそれぞれに書いてもらおうという事が満場一致で決定しました。宜しくお願います。

▽同様に、ツアー登山に積極的に参加されている三井さんには、近頃注目を集めている「ツアー登山の功罪(?)」について書いてもらおう事になりました。

▽博識で周囲を圧倒する高橋さんは、最近樹木の写真を撮り始めたそうです。歩いていて一番我々の眼に留まる、地面から高さ1・5m辺りの「幹」の部分を集めて撮っているそうです。学生の頃は地面しか見られなかった山男・女にとっては、新鮮な景色かも知れません。

▽日本北限のブナ林は何処か？ 札幌の南にある「黒松内」が北限、という説に皆さん納得しました。(後にインターネットで調べたところ、Wikipediaには次の様な説明がありました。「一般的には北海道黒松内町のものがあるが、実は最北限のブナ林は隣町の寿都町にある。」)

▽最近では商社でも海外勤務は嫌われているようで、隔世の感がありますが、英語教育を小学校から始める事は全く無駄な話だ、そもそも国語がまとも出来ない連中に英語を上手く話せる訳がない、と言うのが海外駐在を長く経験している方々に共通した意見でした。

○「終戦記念日」の翌日という事もあって、開戦当時の事情が良く分かる書籍として、『沈黙の提督井上成美 真実を語る』(新名丈夫著)が紹介された。

○種子島出身の高崎(治)さんが何故山岳部に入ったの？ 「(新人生に対する)クラブ活動紹介の時に、中村(正、昭28年卒)さんが壇上で飯盒の水を飲み干し、『奥多摩の水は美味いぞ』と一言。これに感激した」。後日談として、中村(正)さんから、飯盒の水は実は国立の水道の水だった、と打ち明け話があったそうです。オーション会のメンバーはこの演技に騙されたことになりましたが、後に高崎(治)さんがこれをコピーして新人を勧誘したところ、これも大成功だったそうです。

■平成22年9月21日■

【出席者】中川、三井、高橋、竹中、本間、中村(雅)、高崎(後、記録)

異常だった今年の夏の暑さも先が見えたとは言いながら、この日も日中の気温は大変なものでした。同日、中村(保)さんがH.U.H.A.Cに投稿された「2010年早稲田大学山岳部中国白芒雪山山群偵察計画書」(同部創立九十周年記念事業の一環)が紹介されました。出席メンバーの印象は様々でした。

▽やはり、つい先日実施された「懇親山行、苗場山・鳥甲山」が主な話題になりました。17日は全国的には好天の地方が多かったのですが、苗場山の周辺だけは例外で、結構な雨量だったようです。雨対策の装備をどこまで身につけたかで濡れ方が大きく違ったようです。車で早めに宿に入るこ

とが出来て、飲み始めも早かったとか。
▽鳥甲山は、岩場を避けたルート選択は良かったもののキツイ登りに皆さん苦勞されました。年齢が10歳違っても荷物の重さが均等なのは不公平ではないのか？ の声もありましたが、無視されました。宿泊した屋敷温泉・秀清館は気の置けない温泉宿で皆さん満足の様子。弁当も良かった(1千円の価値あり)。公式記録は、苗場山を竹中さん、鳥甲山を佐藤(久)さんが担当です。乞うご期待。

▽越後の山は奥深くて良いねー、との結論に至り、懇親山行で再度「越後シリーズ」を復活するべきだ、加藤(博)さんが三条に住んでいる間に連れて行ってもらう、という事になりました。加藤(博)さん、宜しく。

▽歳のせいにしたくはないのですが、トロッコ道で引っくり返った、犬に追いかけて転んで、等々。山道での転倒を予防するには？ 尤もな事ですが、

足元から目を離してはいけない、が結論でした。▽また、休みを多く取らないで歩くために、山道で息を弾ませない対策は？ 山本(健)さんは、その昔、上高地から歩き出して、明神は言わずもがな、徳沢園も通過、横尾でも止まらず、本谷橋方向に悠々と歩き続けられたそうです。この秘訣は？ 息を大きく吐くように気をつけると良い。

米国で公式の登山教育(?) を受けられた佐藤さんによれば、ヒマラヤ経験者が盛んに「大きく息を吐け」と強調されていたそうです。丹沢の大倉尾根を呼吸回数を数えながら、ノンストップ3時間(最近3時間半?) で登られます。

▽山での食事談義・米飯は当日のエネルギーにはならない、次の日。関野吉晴氏(グレートジャーニー)の昼食はナッツ・チョコレートだった。ピスケット・チョコ・コンデンスミルク等は即効性がある。ツール・ド・フランスの選手の食事は徹底的にバスタだと聞いた。餅も即効性には良さそうだ、等々。

○近頃は登山道で「熊に注意」の看板を良く見かけるようになりました。なかには極く最近「睨み合った」経験のある会員もおられるようです。(ご注意方!!)

○次の懇親山行は、12月に本間さんの企画で箱根「湯坂路」です。

——平安時代以前の東海道は、険しい箱根山を避けて足柄峠を越えていた。鎌倉時代に、幕府は京都朝廷との連絡を密にするため、距離的には短い箱根越えを主要な街道とし、「湯坂路」を普請した。江戸幕府によって東海道が定められるまで、「鎌倉古道」として当時の幹線道路だった。802年(延暦21年)の噴火により足柄路が一時閉鎖された時には、迂回路として利用された——と、富士山研究家から解説がありました。

■平成22年10月18日■

【出席者】 佐藤、中川、三井、遠藤、高橋、蛭川、本間、小島、岡田、中村(雅)、高崎(俊)、記録、久しぶりに北海道から蛭川さんが元気な顔で参加されました。札幌生活を満喫されている様子でした。

▽三井さんが「深田百名山」を完登されました。10月16日、同期の遠藤さんと一緒に、太平山荘から敷沢新道経由で仙丈岳に登頂されたの快挙です。(三月会で把握している「深田百名山」を完登されている会員の方々は三井さんの他に、高橋(昭38年)さん、蛭川(昭39年)さん、小野(昭40年)さん、藤原(昭44年)さん、ですが、「俺もやっているゾ」の方はお知らせ下さい)

次の目標は？ 「二百名山」も良いが、登り難い山が結構の数ある。雪のある時期しか(夏道無し)で登れない山、時間がかり過ぎる(沢ヶ岳)等、当面は考えていない。

▽今日の話題の中心は、やはり、中高年会員登山隊による「北岳パトレス第4尾根登攀」でした。すでにHPに記録が報告されていますが、当事者からの直接の体験談には迫力がありました。我々が現役で岩を攀じ登っていた頃の大原則は「3点確保」だったが、現在は「2点確保」。このためには、昔とは比較にならない程の「握力」、「腕力」が必要になる。トレーニングには水泳が適しているかも知れない。クラシックなアルパイン・クライミング、フリー・クライミング、ボルダリングなど範疇が細分化されて来ている。

▽道具も変わった。カラビナは、昔は1個単位で使っていたが、今は「ヌンチャク」と呼ばれる、2個セット使いが主流。安全性(伸縮)、ザイルの滑り、が良くなる等利点がある。ゼルプストも「安全ベルト」に変わり、安全性、着脱性が良くなった。

▽来年の再挑戦に備えて、これから毎月第1金曜日に近郊の岩場でトレーニングを実施することになった。ツツラ、越沢パトレス、等。

▽行動中の食事に工夫が要りそう。ゴム管は頂けない、マドレーヌはOK。最近のプラスチック・ケースに入った流動食を試してみよう。

▽遠藤さん、「日本百名城」に登録されている根室

の「チャシ」に行ってみたが、遺構と思われるものも説明書きも見当たらなかった由。北海道には「チャシ」と呼ばれる「城址(砦跡)」が350カ所以上もあるそうです。(Wikipediaによると、チャシとは山の上にあつて割木の柵を巡らせた施設を指す語。正しくは「チャシの跡」という意味の「チャシコツ」というアイヌ語を使うべきであると指摘する研究者も存在する。かつてチャシが存在した場所が「チャシコツ」と呼ばれて地名となつている例は多い。) アイヌ民族とアメリカ先住民族の相違点・共通点は何だろうか? 宿題です。

▽鳥甲山の麓、僻地で有名な秋山郷に関連して、佐藤さんが『北越雪譜』(鈴木牧之/1770)1842年/著、ワイド版岩波文庫)を紹介されました。雪の結晶の話の他に秋山郷の様子(稲作が出来なかつたので、藁が無く、従つて草鞋も無かつた。深雪のため飢餓で全滅した部落もあつた、等)も書かれています。

▽米国ソルトレーク市在住の加地(昭33年)さんから市川(昭34年)さん経由のメールが紹介された。「針葉樹会員の方々、特に若い方を山に案内したい。往復の航空運賃を自己負担してもらえれば、現地での宿泊場所を含め一切の面倒を見る、山に登る支度を用意して来るだけで良い」
加地さんのメール・アドレスは

ykachi@philosophy.utah.edu です。

一橋山岳部創立九十周年記念事業に関連して色々なアイデアが提供されました。針葉樹15号の発行は是非実現させたい。それには若手会員の協力が必須である。

○中村(保)さんの実績を基盤に「東チベット」の未踏峰に登りたい、これにも若手会員の協力・参加が必須になる。昨今の中国情勢から、「東チベット」が困難な場合にプランBを考えておく。候補として、ネパールヒマラヤのチベット側に半島のように突き出した部分。最近まで外国人に開放されていなかった地域。

○国内記念登山としては、富士山清掃登山(バイオンニアだった)、芦安地区の登山道整備(芦安山岳館との共同事業)、「ぐるり丹沢」を長年やつていける施設の子供達の活動を援助する、等々。

■平成11月15日■

【出席者】佐藤、中川、三井、高橋、本間、竹中、中村(雅)、松尾(信)、高崎(俊)、記録

松尾さん(アダージオ)が久しぶりに出席されました。山本(健一郎)婦人から託された遺品で、「ピンズークシユ」と思われる写真3枚を持参されました。遠征隊員だった何方かに引き取ってもらったことになりました。アダージオには今年もハギマシコ、オーマシコが飛来し始めたようです。大型望遠レンズをお持ちの常連の方々には楽しみな季節に

なりました。(マシコはスズメ目アトリ科マシコ類で漢字では「猿子」と書くそうです。)

▽鳥の話題では、恩田川でカワセミを見る事が出来る、神田川水源の井の頭公園池ではカイツブリが見られる、等々。地質学系の話とか。所謂社会学系大学の卒業生の話題としては畑違いと思われる内容で論争が起ころのは、興味深いものがあります。(実は、フォロワーするのが大変です。)

▽12月12日予定の懇親山行(東丹沢・白山)の案内が本間さんから紹介されました。(H U H A Cに掲載)多数の皆様の参加を期待します。山行幹事の計らいで行動(山歩き)は昼までとし、後半は温泉と酒席になりそうです。

▽北岳パットレス、4尾根の上部で大きな崩落が起こったようです。中川パーテイが挑戦された1週間後のことでした。今登れば、新ルート初登攀になります。暫くは登山禁止になっています。来年の夏までに禁止が解けなければ、チンネに転進するか、という話も出ました。不帰ノ嶮に行きたいという話もあります。皆様、意気盛んです。

▽山登りには持久力・筋力の維持が大切です。岩登りには柔軟性も。日頃、有酸素運動で心肺機能を高め、筋トレで筋肉を鍛えれば、前期・後期を問わず高齢者になつても山登りを続けることが出来ます。これらを実践している会員の数は多いようです。(山登りのトレーニングには山登りが一番、昔も今も変わらない、の声あり)

▽三井さんから、山行幹事を増員したい旨の話があ

りました。蛭川さんが札幌に移られて欠員になっている穴埋めをしたいそうです。また来年は、恒例になっていた5月のアダージオ集会を復活させる意向が示されました。

▽中村(雅)さんが「エベレスト街道」トレッキングから帰って来ました。カラパタルの頂上は霧の中だったけれど、この日を除けばゴーキョ・ピークを始め天候には恵まれ、壮大な景観を楽しめたそうです。佐藤(久)さんのノウハウ活用で、費用はドア・ツー・ドア、22日間、ガイド・ポーター付で一人当たり約20万円だったそうです。(一般旅行会社の半額以下でしょうか?)。高地順化に気を配ったので、高山病の症状は出なくて済んだそうです。

○米国ソルトトレイクにお住まいの加地さんから熱心なお誘いを受けているので、若手にロッキー登山を勧めよう、という意見があります。条件が揃えば「90周年記念事業」に組み入れても良いのでは、という見解もあります。

■平成22年12月20日■

【出席者】 佐藤、三井、遠藤、本間、竹中、蛭川、小島、佐藤(久)、中村(雅)、西牟田、高崎(俊、記録)

久しぶりに参加者が10人を越える盛会でした

が、このところ常連の中川さん、高橋さんの顔が見られませんでした。北海道からは蛭川さんが参加されました。

▽米国在住の加地さんから何度かご招待を受けているロッキー山脈へ山登りに行こう、という方々が出て来ました。現在判っている所で、中川さん、遠藤さん、三井さん、市川さん(?)。時期は来年の秋。是非学生さんにも声をかけようという話も出ましたが、この場合、時期は大学の夏休みになります。「誰も行かないだろう」と幹事役を引き受けられた佐藤さんには思惑違いになりました。

▽来年の懇親山行の候補地として、金城山(巻機山の前山にあたる、標高は低いが急登が続く)、会津の御神楽岳(磐越西線の津川駅からのアプローチになる。ここも急な登りで沢あり岩あり、特に下りが怖い)が上がっています。5月に松尾さんの蓼科「アダージオ」集合も復活する予定になっています。

北海道でも懇親山行を、という話に関しては、現在在住の会員から「東京側で旗振り役が必要、各論になったら支援しよう」との提案でした。行きたい山の筆頭は羅臼岳のようです。次回の懇親山行は、2月11日に倉岳山です。中央線の梁川駅若しくは鳥澤駅が起点になります。

▽遠藤さんは、どうしても屋久島の宮之浦岳に登りたいので、同行者を募っています。時期は10月から11月の雨の少ない時期に。ツアーは沢山あ

るが、気の置けない会員と一緒にいきたいそうです。

▽今冬、奥秩父の国師岳にアイゼン・ピッケルを使って登る計画があります。大池小屋に泊まれば何とかなる、小屋から迎えの車を出してもらえ、そうです。

▽本間さん、暦年2010年の山行日数が50日を越えるそうです。体調不良もあって3月までは休眠されていましてから、毎月5日以上も山に入っていた訳で、大変な快挙と言えます。来年はこの記録を更新される事でしょう。

▽90周年記念事業としてヒマラヤに行くのだとしたら、ただ山に登るだけならこのご時世面白くない。現地の住民の教育・健康・衛生等生活レベルの向上に役立つ様な事を考えるべきだ。現地の学校で不足している文房具・書籍・雑誌等を定期的に届けるとか、地域に貢献できる様な事を具体的に考えよう、という意見が出て来ました。

▽また、90周年記念事業に関しては、100周年を大きな節目として考えよう、そのための出発点になるような企画を考えよう、という前向きな話と、100周年までこの会が持つだろうか、という懸念とが交錯しています。

○カラオケの大家でもある遠藤さんの流行歌の歌詞・歌手の話から、山岳部も昔は良く歌ったものだ、今は歌われなくなってしまう昔の格調の高い愛唱歌を保存して継承したいものだという話

になりました。例えば、オーシヨンの「或るメ
ンバーの讃歌」（作詞・作曲はオーシヨンの共
同制作?）とか、立川高校山岳部OBが持ち込ん
だと言われている「田螺様（殿?）」とか。

〔補足〕

○加地さんと望月さんが顔合わせしました。

川名真理

12月10日（金）にアメリカから一時帰国された
加地さんと、現役の望月くんが顔合わせをしまし
た。学生幹事・山行幹事の本間さんと、学生幹事
の川名も同席しました。

来年8月末から9月前半のどこかで、加地さん
ご招待により、望月くんがアメリカの山へ行く話
が具体化しました。望月くん自身は決定。ほかの
学生にも声をかけてみたいとのことでした（山は
最大3泊程度? 往復1週間程度? で検討。メ
ンバーにもよる。加地さんが教案を考え、望月く
んに提示。テント泊、荷物は20キロ以下、クマ
対策のため特別な容器に食料を入れる必要あり。
アプローチに時間がかかる、などのお話が出まし
た。

○加地君と国立で旧交を温めました。 上原利夫
12月11日（土）に加地君と国立で旧交を温めま
した。12月12日の懇親山行に誘いましたが、当
日ご家族との夕食会が予定されていたので、参加
できず、残念がっていました。前日に本間、川名、
望月の諸姉姉と盛り上がったようですが、懇親山

行参加者には、よろしくとのことでした。

国立富士見通の「葱や平吉」で豆腐定食を食べた
らおいしいおいしいと喜んでいました。山岳部小
屋に案内しましたが、鍵の開け方がわからず、何
人かに携帯電話で尋ねたが通じず、内覧はあきら
めた次第です。兼松講堂ではイノベーションの講
演会があり、建築家安藤忠雄氏の話を少しだけ聴
きました。

加地君とは、お互いの研究について情報交換し、
参考になりました。私の研究についても役立つコ
メントをもらいました。加地君は、ユタ大学の哲
学科の名誉教授（ソクラテスと孔子が専門）です
が、いまは文学科の大学院で俳句を英語で解説し
ている教授とのこと。山へ行かない日は大学の研
究室で蕪村などを読んでいますが、98歳の母上が
60歳から始めた沢山の俳句の句集を編纂し7冊
を箱に入れ、知人に贈る労をとった。その解説を
書くため、東海岸のプリンストン大学とコロンビ
ア大学の図書館へ資料を見に行ったという。やる
ことは本格的です。脱帽。
来夏、多くの方と一緒に登れるのを楽しみにして
いました。

平成22年度会費納入のお願い

平成22年度の会費納入をお願い致します。納入状況等に関するお問合せがありましたら会計幹事までEメール／電話にてお問合せ下さい。

◇会費納入先銀行口座

- (1) 銀行名 三菱東京UFJ銀行 赤坂支店
- (2) 口座名 針葉樹会
- (3) 口座番号 普通口座 4825647
- (4) 振込時「摘要欄」にお名前(卒年次)を「ミヤシタ(S57)」等記入下さい。

◇会費額 卒業年次によって左記のようになっていきます。

- ①昭29年以前の卒業(昭29を含む) 免除
- ②昭30～42年の卒業 4000円
- ③昭43～62年の卒業 6000円
- ④昭63年以降の卒業 5000円

◇幹事連絡先

宮下 克彦(昭57卒)

E-Mail Kat.Miyashita@mitsui-steel.com

電話(会社) 03-5544-6925

Fax(会社) 03-5544-6483

(三井物産スチール・第二部門造船鋼材部)

編集後記

▼前号、会報119号の「特集・一橋山岳部の軌跡」には数多の会員から感謝の言葉が寄せられました。昭33年卒の宮川会員からは『その素晴らしい内容に圧倒されました。一橋山岳部OBの活躍の軌跡はまことに感動的であります』とのお手紙が届きました。会員以外からの購入依頼も寄せられています。改めて倉知さん、中村保さんのご努力に御礼申しあげたいと思います。

本号は多くの会員から寄稿を頂いて、従来路線での発行となりました。どの原稿も、山、そして山の仲間への想いがこもったもので、会員の皆さんには喜んでいただけるものと確信しています。そして佐藤さんと共に春日井さんのご冥福をお祈りいたしたいと思えます。(小島)

▼三井さんと中村(雅明)さんの原稿は、すでに一橋山岳会のHP(ホームページ)にも掲載されています。HPの山行報告欄にはこのほかにも、ランタン谷のトレック、秋の懇親山行・鳥甲山、北岳バットレス四尾根、鹿島槍冬山偵察行など、会員から多くの力作が寄せられています。HPを閲覧していない会員もいるので、これら力作と会報への掲載原稿と、どう調整してい

くかが懸案です。何かよい解決案がありましたら会報幹事までアドバイスをください。

個人的には、相変わらず沢と奥多摩で山仕事の真似事をして汗を流しています。念願のチェンソーも買い、ますます山にハマリそうです。(井草)

▼世界遺産の選定基準として1992年に新たに加わったものに「文化的景観」という概念があるそうです。長い間、人が自然に働きかけることでつくられた景観とのことで、棚田などがわかりやすい例です。信仰の対象も含まれるため、富士山も文化遺産として登録準備を進めているのは、みなさまもご承知のことと思います。

日本アルプスの山々は、ふつうでいえば自然遺産に分類されるでしょうが、ひととき思い入れのある私たちにとって、これはまさに文化的景観だなあと、お寄せいただいた原稿を読んでも感じました。なにか教養があるわけでもないのに、世代を超えて、ゆるがない一定の思いを共有させてくれる存在。そこには「千の風」が吹いていると思います。(川名)